

Title	支那旅行記
Sub Title	
Author	柴田, 常恵(Shibata, Joe)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.4 (1939. 7) ,p.85(613)- 138b(666b)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿繪:支那旅行寫眞
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390700-0085">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390700-0085</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 支那旅行記

柴田常惠

今年五月我慶應義塾大學より支那大陸に出征中の皇軍將兵慰問と併せて同地の考古學的調査を行はんが爲、調査團が派遣されることゝなつた。その一員として余は支那に於ける考古學的の一般大勢を察知し、今後に於ける斯學研究に資するの緊要事たることを思ひ、大山柏氏を班長とする北支班が殷墟、大同附近の史前遺跡の發掘調査を行ひ、松本信廣氏の一班が中支方面に於てこれまた發掘を試みんとするに對し、別に學生清水潤三を伴ひて一班を編成し、中支、北支を併せ踏査するに至つた。五月十一日午後三時、特急富士に乗じて松本班と共に塾長以下塾關係者、及び一般歡送者の熱烈なる聲援に感激しつゝ、東京を出發したのである。

本班の行動に關しては先に復命書を作製して塾當局に報告し、且つそれが三田評論誌上に發表されたのであるが、此處には改めて旅行記の形に於て稍詳細に記し、以て斯學の將來に資せんとするものである。勿論、近々七十日の間に支那の主要部分に互り軍事匆忙の間に之れを實行せんとしたのであるから、

各地に十分なる日時を費やすの餘裕を有せず、種々の事情に依つて満足なる調査をなしたとは云ひ難い。且つ歸京後も多忙を極めて末だ旅中得たる所の資料に對し深く考究を加へることが出来かねて居る。故を以て此處には單に結果をありのまゝに發表するに止め、若し今後の研究に示唆を與へ得れば望外の喜びとするに満足せねばならぬのである。

前述の如く、五月十一日東京發、一夜を車中に明して翌十二日午後三時過長崎に着いた。落ち着いた古き港町の氣分にゆつくり疲れを休め、馴染ある上野屋に泊る。

五月十三日 出帆迄の時間を利し、福澤先生留學當時滞在された光永寺及びその折使用された古井戸を見て先生に敬意を表し、諏訪神社に參拜して長崎丸に乗船す。午前十一時出航、海上極めて平穩、同行の學生諸君と甲板で談笑し、記念撮影等行ふうち、早くも夜となる。長崎では塾員たる三井物産支店長村上一郎氏の御厄介になつた。

五月十四日 起くれば既に海水は少くし赤黄く濁り揚子江へとさしかゝる。河口より五時間許り手前にて海の色が變化するとのこと、流石に大河である。兩舷に遠く延びた支那大陸は恰も大なる灣を望む如く何處を河口と認むべきか判斷に迷はされる。進むに従ひ崇明島外二、三の洲が現れ、河幅の大きが益々想像つかなくなる。晝飯時となつて船はいよゝゝ黄浦江に入る。吳淞の激戦は破壊された殘骸の建築物が孑然として立てるに依つて窺はれるのみで、既に平和の色が濃い。併し我々は遂に戦地に入つ

た緊張に身の引きしまるのを覚える。兵隊を載せた小蒸氣が往復し、船の人々と萬歳の交換、將兵への感謝の念が深まるのを禁じ得ない。大連汽船の埠頭より上陸、塾員芦澤氏、三井物産の人々に迎へられ萬歳館別館に入る。四時頃より休む間もなく、芦澤氏の案内で開北戦跡を一巡する。當時のまゝに保存されて居る爲懐愴の氣に満ち、一同嚴肅な面持で見學する。商店に残された商品が彈痕を殘しつゝ埃にまみれて居るのは感慨深かつた。併し現實に戦に臨まなければ親しく戦跡に立つて精しく説明を聞くと雖も、尙ほまだ及ばざるものあつて、激戦の様相が適確に諒得し兼ねることを一同痛感し、考古の學に携はるものとしては深く鑑みて心すべきを思つた。

十五、十六日　　は軍當局及び其他を歴訪して、出發の用意と聯絡に費したが、當局より慰問團よりは眞面目な學術調査團の進むを待望し居る旨聞かされ、大いに意を強うした。その間芦澤氏及三井の好意で共同租界佛租界を數回に互つて視察した。租界の複雑性と之に對處する當局の苦心の容易ならざるを窺はれ憤懣の念禁じ得ぬものがある。黃浦江を溯る時見た兩岸の所謂英米權益や各國の國旗を靡かせたジャンク等と共に新たに支那といふものを考へなほして見る氣になる。我軍の占據區域たる虬口開北の寂莫たる有様に引きかへ、河向ふの繁華さは事變の反映を見出し難い。路上に充つる支那人が我々を注視する其眼の状態に依つて、一切の事情が含らるゝを知るのである。

五月十七日　　曇天少雨の中を北停車場から南京へ向けて出發する。客車とは名ばかりの我國には存

せない四等車で、窓ガラスは全く破損し、鎧戸の損傷せるもあつて、吹込む雨に風は寒い。それでも貨車でない丈け戦地のことゝ感謝せねばならず、左程の苦痛とも思はない。七時廿五分に列車は動き出したが、開北の廢墟を抜け眞茹迄は戦火の跡著しい。眞茹以西は一望千里の大平原、江岸の沃野が展開し耕作も行はれ、水田の緑が美しく平和の色が漲る。時々停車する驛の附近には破壊された家、トーチカ或は我爆撃に遭ふて顛覆した貨車の殘骸が見られ、車中の兵士達と共に事變下たることを強く考へさせられる。

車窓より壘々たる土饅頭を見ては墓制を考へ、田の畦の割り方が水牛使用の耕地法に由るを思はしめ、畦畔に點在する六角形藁屋根葺の茶亭とも見らるゝ小舎等が、縦横にクリークを通じて水は豊富に存すれど、灌漑の爲め牛馬を使役して汲上ぐる爲で珍しく思へた。蘇州に到れば北寺の大塔が高く聳え、虎邱も又目近に望み得た。丹陽附近より丘陵地帯となり、遺跡の豫想される地點が多い。丹陽は古鏡の銘文にも見へた古來よりの銅の産地、下車の豫定を致して居らぬが製鍊所の所在地とも思はれるから、將來は種々の發見が此地方より致されるかと思ふ。五時半鎮江に着いた。著名な金山寺の塔が望まれる。此の附近に點在せる小さい農家には切妻のアンペラ屋根のものが見られ、長方形のプランを爲して面を壁と爲すもあるが、其下地をアンペラを以てするもあり、一方口で埴輪の家との關係が想像され、網代形を附する埴輪家とは殊に相似たものがある。八時近く南京の城壁が夕闇の中に現はれて來た。蜿蜒と

續く灰色の城壁。一同再び極度の緊張に包まれる。日本時間を用ふる爲め時刻は進むも日はなかく暮れざりしも、漸く暮るゝと共に、雨は止めるも未だ曇れることゝて自動車を走らす間に忽ち咫尺を辨せざる暗黒の世界と爲り、勝手知らざる未知の南京に入城、哨兵の銃劍光る中を兵站司令部に赴き、當局の好意で指定旅館寶來館に入る。

五月十八日 曇にてかなり寒い。本日は松本班と共に新城博士の案内にて接收品を一應巡覽する。先づ國立中央研究院に赴く。北極閣下の勝地を選び大規模な施設があるのに一應感心する。堂々たる近代建築にして然も至る所支那建築を取り入れたる點、支那文化の根強さを感じる。其一部を爲す歴史語言研究所には殷墟出土品その他考古學資料あり。更に明故宮にある古物陳列所に至る。此處にも多くの歴史、考古學の資料あるを認め、轉じて陶瓷試験所に至り、北京より轉送せる遺物類の多數荷造りのまゝ收納しあるを見、夕刻歸還した。

五月十九日 本日より松本班と別行動をとることゝなり班員學生清水潤三と共に宣撫班を訪れ今後の活動に關する連絡をとり、班長佐藤鶴龜人氏の案内にて下關を見學する。種々班長より班の實績につき説明を受く。下關は大半廢墟と化し激戦の址を偲ぶに足る。此の邊揚子江は意外に狭い。更に北極閣の氣象臺を見學し、南京を一望の裡に收む。流石は地形上都たるべき地たることが窺はれ同時に南京を理解する上に大いに役立つた。古物陳列所を再訪し、收藏品を調査する。

報恩寺の明代と思はれる鐵磬は鐵製なる所が面白い。同寺出土と云はれる僧班的達の碑は銘により日本僧中巽の書であることが知られ一同驚喜した。中巽は我國に於てはあまり知られて居ないが、書史會要補遺外域の條に斗南永傑と並んで能書家として權中中巽と見えて居り、支那にその名を知られた人であるらしい。鎌倉時代に大陸に氣を吐いた我國人として注目さるべき人であらう。事變の只中であつて支那の首都南京に此の人の遺物を見出した我々は誠に感慨無量なるものがあつた。同寺の石幢は阿彌陀經を刻し、二面に塔を刻んだ精巧なるもの。銘に「崇禎丙子鞠月燕超居士徐久節」とあり。又明故宮出土の元代石敢當がある。「石趕當」とあるのも注意を要する。此處に明故宮の礎石がある。大なるものは一邊六尺七寸あり、丁重なる工作にて臺を四角形とし、上に徑四尺二寸五分の圓柱座を造り出して居る。造り出しの側面が内返りをなして居るのは我國に見ざる所である。

明故宮午朝門を調査し、その基部にある唐草彫刻を手拓した。此の附近には黃釉瓦、陶器片が多量に散布して居る。此の夜徐州陷落の噂を耳にした。併し確報ではなく、戰地にありて却て内地より戰況を明かに知り難いことを體驗したのであつた。あまりに早いとて信ずる者少く、その眞なるを知り得たのは數日の後であつた。

五月廿日 快晴 本日は先づ難民區に開かれて居る所謂泥棒市場を巡覽した。恰も關東大震災後諸家所藏の古物が流出した如く、此處にも數多くの古物が見られたが極めて僅かなものを除いては單に參

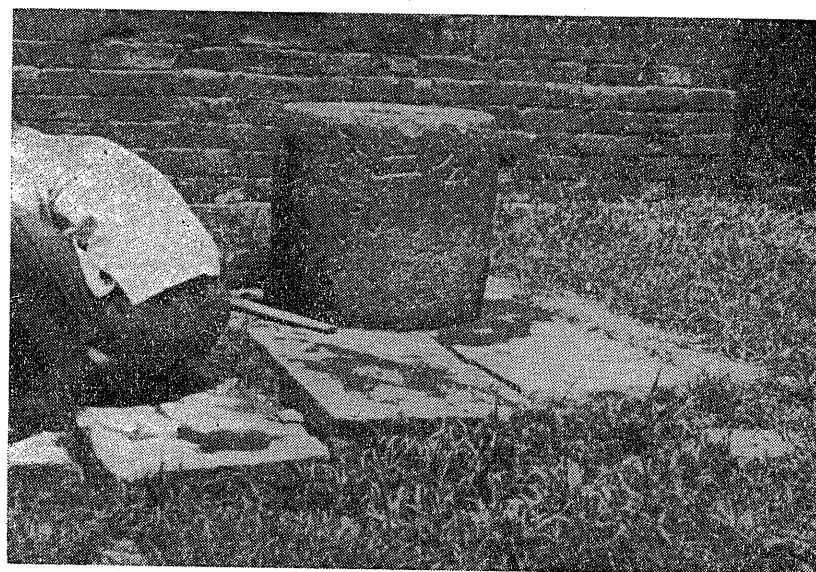
考品の程度にて目を驚かすが如きものは見當らなかつた。引き續き陶甞試験所、及び歴史語言研究所に於ける松本班の活動を援助し、一日を送る。空には我海の荒鷲が堂々飛翔して居り、内地にて聞いた活動の状を目の當りにして感慨深きものがあつた。

五月廿一日 晴 難民區を抜け水西門より城外に出で城西の莫愁湖に至る。水西門外のクリークにはジャンク多數碇泊し、杜甫の「破國在山河」の詩を偲ばせるものがあつた。莫愁湖は梁の武帝の詩に名高い少女莫愁の哀話を語る故地なれど、今は荒れに荒れ、蘆荻茂り、遠く清涼山を望む景もさして勝景とは云ひ難く見るべきものが少い。再び城内に入り、清涼山に向ふ。

六朝以來の名刹清涼寺がある。現在は三寺あり。先づその一、小九華寺に至る。細長い土塀に圍まれた域内に門、觀音殿、十王殿、地藏殿が一直線に並び、その左右に僧坊、その他小堂が配されて居る。大體に於て支那住宅建築の平面をそのまゝ、利用して居ると云へる。門には中央に韋馱天、左右に土地神、及び九天雷祖、風伯、雷公、雨師、閃電を祭る。觀音殿には送子觀音が置かれ、隅に道教關係の小像が數體ある。觀音殿の左方には玉皇殿が附屬し、玉皇大帝以下道教關係の像がある。十王殿はその名の如く十王の像が祭られて居る。最奥の地藏殿は本寺の本堂にて五間五面の略正方形の切妻造建築に二間通りの庇を前方に附したもので庇は側面より見れば一見唐破風を見る如き極めて珍しき建築である。勿論年代は極めて新しいものと思はれた。内部には本尊以下八體の地藏を安置し、本尊の兩脇侍を除いては



悉く座像、五佛寶冠を戴き、釋迦定印を結ぶ我國には類の少い像である。支那の地藏は殆んどこの形式のものである。衣服を着せる風ありと見え、皆衣服を纏つて居る。脇侍には立像錫杖を持ち僧形の我國



第一圖 公共井戸 (南京)

一般の地藏像に近きもの、同じく立像にて髪を蓄へ鐵鉢を持つものがあつた。此の二體は主僧の言によれば地藏とのことであるが、やゝ疑も持たれた。一般に支那僧侶は學も低く、尊名等知らぬ者が大部分である。瓦の葺き方も又面白い。丸、平瓦の區別なく、平瓦を交互に表裏をかへして葺いて居る。軒瓦は例の前垂式であるから、一は下端に間隙を生じ、一は軒板を覆つて今にも落ちさうに見える。此の寺は極めて道教的色彩濃く、前述の土地神、雷神、玉皇大帝等、道教關係の神々を多く祭つて居る。文昌星の像も見える。大體に於て支那の佛教は著しく道教を習合して居り、我國の神佛混交と同じ状態を示して居る。

此處を辭し、谷一つ隔てた清涼禪寺に行く。此の寺が古の清涼寺の後を傳へて居るらしいが、小九華寺に比して頗る荒廢し、本堂一字が僅に残つて居る。禪寺故本尊は釋迦であるが、印相は極めて珍らしいものであつた。寺後の空地に門の扉石がある。宋明の交の見事

な彫刻あるものである。此處の甄造の塚中には文字甄を含んで居る。之等は後方の山中、地下五尺餘の所から出土するといふ。流石古の名刹の舊地として興味が深い。

更に谷を隔て、善慶寺がある。禪寺にて中庭を廻つて四堂が建つ所、全く住宅建築と選ぶ所がない。本尊は釋迦、左右に阿難迦葉が立つ。後方に文殊、普賢、左右の壁面に添つて十八羅漢の像が並ぶ。支那では十六に非ずして十八羅漢が普通である。極めて異形の像にて辨慶の如きもの、仁王の如きもの等日本の佛像の概念とは凡そ遠いものがある。然も之等羅漢像は波を形どつた共通の臺座の上に波間に浮ぶが如く作られた各種魚獸の上に立つのである。他の諸堂には道教關係の像が見られた。特記すべきは塑像の多いことである。その後の見學に於ても常に感じたが、大抵の像は塑造と見てよい。木材を得るに困難な支那に於て之が發達したのは當然であるが、極めて巧妙で破損した部分により始めてそれと知る場合が多い。當寺の像高約二丈の巨大な四天王も塑造であつた。之が爲に一方破損も多く、支那に古像の少き一つの理由であると思はれる。此の寺にも甄が多數散在して居た。紋様よりして六朝頃と思はれるものがある。之等數個は標本として持ち歸ることとした。

五月廿二日 晴 午前中は居留民團長須藤氏のコレクションを拜見する。見事な石佛、陶器、硯類あり。午後は玄武湖に行く。公園として事變前は遊樂の地であつたらしく、水は濁るとはいへ、紫金山を仰ぐ湖畔の景は楊柳の並木と共に捨て難い。塾員山岸少尉に會ひ、快談、頗る喜んで居られた。次い

で大鐘亭に至る。「洪武二十一年九月吉日鑄」の銘ある大銅鐘にて高さは内部にて約十二尺三寸、徑七尺六寸八分、底の厚さ六寸ある。銘に「吉日」とあるが、我國に於て「吉日」なる語が室町時代に入つて現れるのと、年代的に一致して面白い。此の鐘鑄造の際犠牲として鎔銅中に飛び入つたと傳へる三人の姉妹の像が後の堂内に安置してある。折柄小さい窓より差入る夕陽に照らされた女人の像は物凄く見えその奇しき傳説と共に我々を一種怪奇な世界のうちへ引き入れた。

鼓樓は清代の建築で我國の天守閣を思はせる建物である。康熙廿三年、康熙帝巡狩の碑がある。續いて朝天宮に行つたが閉鎖されて入ることが出来なかつた。長い日を利用して雨花臺に登る。斜陽を浴びて立つた新戰場は鬼哭愴々、彈丸、骨片、軍服のきれはし等散亂し、南京市街を眼下に見下ろす此の丘陵争奪の如何に激烈なりしかを語つて居る。脇坂部隊の名を永久に止める光華門が破壊された跡も生々しく横はつて居る。臺下の小寺永寧庵の内部は戦に荒れ、椀が散亂し牡丹燈記を思ひ起させる凄しい状景であつた。此處で我々は銅造の原形を塑土で覆つた小佛像を得た。銅心塑像とも云ふべき極めて珍奇なもので如何に塑造が盛んであるか推知される。

五月廿三日 晴曇 二郎廟、定湘王行宮舊址の二廟を一見したがさして得る所もなかつた。午後歴史語言研究所に至り、松本班が古物陳列所より運搬保管せる古物類の拓本をとる。

五月廿四日 晴 宣撫班に佐藤班長を問ひ、蕪湖行の手續をなし、同氏の好意で自動車の便を得、

松本班の學生西岡秀雄を伴ひ先づ紫金山天文臺に向ふ。佐藤氏も同行された。天文臺はさして立派なものではないが、展望は素晴らしい。大陸の雄大さが遺憾なく知り得られる。同時に調査旅行に最も必要な概観がなし得、南京の占むる位置をハッキリ認識し得たのは大きな收獲であつた。此處には清朝時代の銅製子午儀等がある。北京より最近移されたもので精巧な彫刻裝飾を附して居り重要な遺物である。次いで明孝陵に至る。著名なこの陵墓も甚だしく荒廢し、且つ敗殘兵の根據となつたらしく、壕が掘られ、急造トーチカが造られる等、支那兵暴逆の跡が見られ憤慨に堪えなかつた、僅かに陵墓の制を窺ひしのみにて此處を去り、參道の石獸群の中を抜け中山陵を見る。規模の廣大、地形選定の妙、參道及び四周の設計、建築の壯麗、我國にも之に比すべきものを遺憾ながら見出せない。見下せば江南の平野は大海の如く雄大極りなし。中央體育場、ゴルフ場を一巡して見る。大規模な施設にて蔣介石の包負を知るのであるが、併し陸上競技場の如き、又各種競技場の配置の如き我神宮外苑そのまゝの模倣であつて蔣の意圖の那邊にありしやを知り得る。寫真に見る如く破壊された中山門より城内に戻り明故宮、古物陳列所に立ち寄り、佐藤氏に説明をなし、古物舊蹟保存の要を辯ず。八時近く宿に歸る。

五月廿五日 晴 午前中は蕪湖行の件にて關係各所を歴訪、確定することが出來た。引き續いて中央研究院に至り、同所に宿營中の某部隊を訪ひ、隊長蒐集の陶器類を見る。市場にて購入されたのとこのとであるが、立派な漢式土器、宋瓷等が驚く程數多くあつた。前者のうち三個を學術資料として寄贈に

あづかる。

背後の雞鳴寺を調査に行く。之も六朝の古刹である。坂道を登ると左側に阿彌陀殿がある。荒廢して居るが、中には塑壁が造られて居り、我々をして歡喜せしめた。塑壁としては小規模なもので阿彌陀を本尊とせる所が後に見た多くの塑壁と異つて居た。此の阿彌陀は五佛冠を戴き袈裟を着け、攝取不捨印を結び老人の相に作られて居る。左右上方に普賢、文殊その他天部像が多數ある。この堂より一段高き所には財神殿があり、道教の財神を祀つて居る。財神殿より更に上ること約一丁にして寺に至る。塀に圍まれた中庭より中に入ると韋馱天を祀る堂と釋迦を本尊とする一堂及び本堂が一線上に並んで居る。



第二圖 老僧火葬の甕 (南京 雞鳴寺)

本堂は觀音を本尊とし、その後方に小塑壁が見られた。堂の左右には二十五體の天部像があり、住僧の説明は要領を得なかつたが大體觀音二十八部衆の如きものと思はれた。その他左方には娘々殿、關聖殿等道教の神々を祭る堂があり、阿彌陀を本尊とする一堂も存した。之には左右壁下に塑壁が見られ、各廿四體の座像がある。僧の言によれば彌陀四十八願を表はすものと云ふことであつた。此處に於て偶然

僧侶の火葬の状態を見學し得たのは意外の收穫であつた。第二圖に見る如く美しい甕の中に死體を收めた上、下部より火を點するのである。但し我々の見たのは既に終了した後であつたのでその儀式等の詳細を知り得なかつたのは遺憾である。

五月廿六日 快晴 學生清水と二人、南京を午前八時出發、蕪湖に向つた。汽車は南京城内を貫通して中華門附近より城外に出で一路南下する。江南の初夏は實に快い。窓外の小丘陵をなし或ひは小さく起伏しつゝ果しなく擴がる平野はよく耕され、鵲が飛んで居る。水田は概ね小さく、數家族集つて一所に耕作して居る。之は江南の特徴である。漢代明器に見ると同一な家屋の配置が見られる。塚の形状も特徴ある細長きものとなつて來た。道路の極めて少いのが注意される。一時頃蕪湖着。連絡自動車に乗せて貰ひ、樂に兵站本部へ行く。停車場から約一里程離れて居り、始めて行けば容易に探しあてられさうもない。宿舍を定めて宣撫班を訪問する。堀班長は極めて好意を示され、文化工作の寧ろ遅れて居ることを力説された。市中を一巡する。東嶽廟を見たが、本尊東嶽大帝以下多數の奇怪な道教の像を調査し得た。市中は軍人に充たされ、前線基地として戦時氣分横溢、我々も一層張切つた。と同時に支邦人の歸還した者も多く、裏町等全く事變を忘れたかに見える所もある。「鳩ポッポ」を歌ふ子供等も居り、思はず微笑ましくもなつた。

數年前の明治大學の名投手鬼塚格三郎少尉に會ひ、その好意で塾員手塚吉智少尉と一夜を愉快に送る

ことが出来た。手塚少尉は昭和六年經濟學部卒業、現に東電の社員であられる。杭州灣上陸以來の苦心を語られ、得る所多く、當方よりは塾の近況等話した。大變喜ばれ、是非共第一線の状態を、このことに明後日灣沚鎮に向ふことにする。

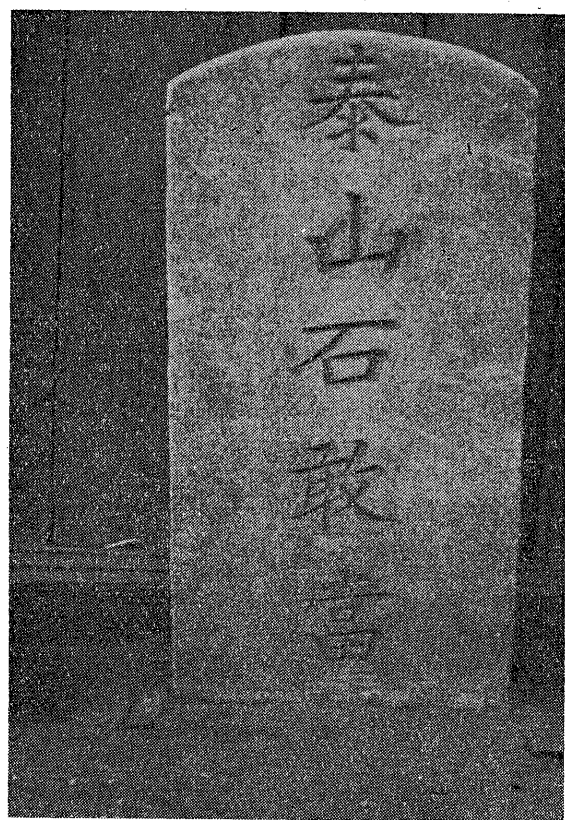
五月廿七日 雨後晴 午前は豪雨を冒して白衣寺、北廣濟寺を見學、調査する。前者は小規模な禪寺にて格別のことはないが、屋根に軒瓦を用ひないのは注目し價する。我國の寺院址にて往々紋様瓦を出土せざる所があるが、併せ考ふべきである。又大棟上兩端に乗せられた魚形は鴟尾と我國城閣建築の鯨との中間を行くが如きものにて興味を牽いた。此の寺の平面は中庭を中にして前方に門を兼ねた一堂、奥に本堂があり、左右に僧坊を配したもので、全く民家の平面と同じであり、兩者の關係をよく窺ひ得る。

北廣濟寺は蕪湖第一の大寺にて先づ山門があり、之には布袋、韋馱天及び二天を安ず。布袋は支那に在つては彌勒と同一視され、常に山門の正面に安置され、韋馱天が護法神としてその後置かれるのが普通である。なほ門は一般に我國のものとは異り、前後に出入口ある堂の形をとる。門の後方には一直線上に釋迦をまつる一堂と大雄寶殿が並ぶ。後者は本尊釋迦、十八羅漢あり本尊背後には飄海觀音の塑壁がある。この後方一段高き丘上に九華行宮なる一堂あり、中央に四佛を安置し、左右に十王、及び牛頭馬頭の像が並んで居るが如何なる意味のものか明かにし難い。この堂の後に接して小磚塔あり。六角

五重裳階附。初重には軛佛を嵌め込んで居る。

午後は孔子廟を一覽し、市中の石敢當の拓本をとる。石敢當は五代の勇將の名であると傳へられる。

此の石敢當の文字を刻んだ石を戸口に建つれば、魔を防ぎ得る、といふ信仰があつて至る所に之が建てられて居る。特に魔は直進すると信じられて居る爲道路の突き當りにある家に主として見られる。稀に



第三圖 石 敢 當 (鎮江)

は奇怪な人面を刻したものの、壁に書きつけたもの等がある。此の信仰は恰も我國の疱瘡除に「義經様御宿」と書いて戸口に張り出すのと軌を一にして居り、同時に石敢當そのものが薩摩、琉球、秋田の諸地方に見られるのは興味深い。支那に於ては中支、北支を通じて廣く普遍した信仰らしく、鎮江、杭州、北京等に於ても見られた。鎮江に於ける一例の如く水路の突き當りにも建てられて居るのは注意すべきであらう。

蕪湖は佛教の盛んな所と見え、電柱等に佛教の標語が記されて居るのは面白く思はれた。

五月廿八日 晴 堀宣撫班長の請により、日支提携親善の一助にもと當地自治委員會要人の參集を



求め、日支間の文化交渉に就き考古學の見地より一場の講演をなした。幸にして要人等も極めて熱心であり、晝飯をも共にし、和氣に満ちた盛會であつた。

午後手塚少尉來訪され、遂に前線に向つて出發する。漠々たる江南の平野をトラックに揺られて、南下すること約二時間、兵士等の雉打ちに興じたり、何等危険を感せずして目的地灣沚鎮に着く。遙かに山を廻らす一大盆地の感あるこの町は手塚少尉の云ふ如く、輕井澤を偲ばせるものがある。町は一部焼失して居るが、〇〇部隊本部は小丘上の立派な洋館にある。部隊長を訪れると溫厚な然も嚴として武人らしい隊長は喜んで我々を迎へられ、極めて元氣に當地の狀況等を種々物語られ、我々の前線に至つたことを感謝された。此の赫々たる武勳を樹てられた隊長將士に敬意と感謝の意を表した後、少憩し甕風呂に入り夕飯を頂戴した。かなり長い滞陣とて全てが完備し、此の日の野戰料理は上海以來嘗て口にせざる上等なものであつた。兵士等は嬉々として食後の一時を樂んで居り、殆んど身の戰場にあるを意に介せざる如き様子を見て誠に心強きを覺えた。夕立の爲見學は明朝を期し、ランプを圍んで歡談する。毎夜銃聲を聞く、とのことなれども、僅かに夕刻數發聞えしのみにて止んだ。塾長宛少尉と共に寄せ書の筆を走らせた。

五月廿九日 晴 早朝少尉の案内にて陣地を一巡する。四周とも一籽の先は皆敵なれど、唯蜒々たる小起伏の連なるを見るのみ。町に出て陶公の墓を見る。宋淳佑年間の人。墓は既に荒廢甚だしく石

獸、華表が僅かに残つて居る。此の地は古くより交通の要衝として知られて居り、現在もかなりの大部落である。既に歸還した住民もポツ／＼見える。附近の調査は到底覺束ないので再びトラックに乗じて歸途に就く。途中二個所の川が昨夜の雨にて増水し、假橋の危険に瀕せるに出會ひ應急修理の上漸く通過する。將兵の勞苦を目の邊りにし、改めて感謝の念を禁せざるを得なかつたと共に、その極めて元氣一杯眞面目なる働きに感嘆し又力強きを覺えた。途上土城と覺しきものを見る。蕪湖附近には泥製にて屋根は茅の莖、アンペラの類にて葺いた明器の家に酷似せる民家が多い。蕪湖より汽車に乗り換へ一路南京に戻る。灣沚鎮の涼しさに引きかへ、途中の暑さは名狀すべからざるものがあつた。

五月卅日 晴 些か胃を害せるにより、休養することゝし班員清水をして明故宮を調査せしむ。報告により、正殿址と思はるゝ大土壇の外約六ヶ所の土壇、及び多數の礎石の殘存することを知つた。なほ正殿址？ 出土の瓦當、石製龍頭彫刻を持ち歸つた。○部隊の發掘品にてその寄贈によるものであり、土壇の北西部一段高き所の地下約二尺より出土したと云ひ、貴重な遺物である。

五月卅一日 晴 ○○兵站司令部の好意により、トラック及び警乗兵を得たので松本班と合同して棲霞山附近の踏査に赴く。先づ棲霞山麓の棲霞寺に至る。寺は六朝時代の草創にかゝる大寺であり、彌勒殿、本堂、藏經樓、地藏殿等がある。宗派は禪宗らしく、彌勒殿には例の如く布袋、韋馱天を祭る。併し四天王はなかつた。本堂は毘盧寶殿の額を掲げ、本尊は寶冠を戴き、大日であるらしく思はれた。

左右側壁前には二十四體の天部像を置く、背面には極めて大規模な塑壁があり、その本尊は飄海觀音であつて波上に浮ぶ大魚の頭上に立つ。背後の塑壁は普陀洛山を表はして居る。塑壁に關しては後に詳述する。寺後の山裾には千佛巖と稱する石佛群がある。いづれも佛龕を掘り、中に佛體を刻むこと雲崗石佛と同巧である。齊代の遺物と傳へるが、大修補を加へられて居るにも拘らず、光背、臺座、天衣蓮瓣等によく六朝の様式を残して居り、寺傳も或程度迄信用し得て興味深きものがあつた。特に像高約二丈の彌陀三尊は前に切石積みの佛殿を設けて居り、本尊の膝にかゝれる天衣は我法隆寺金堂藥師のそれに酷似し、兩脇侍の衣紋、蓮座も頗る雄勁な我飛鳥朝遺品と相通するもので一行を驚かせた(挿繪第四圖参照)。その他多數の小佛も同じ六朝藝術の特徴を有するもので臺座の格狹間に優秀なものが見られたのは特筆に價する。

寺と千佛巖の中間に隋文帝の造建と傳へられる石造八角五重の舍利塔がある。基段に釋迦八相を刻し、塔身は丈高く、四天王、佛像二體、扉二を各面に刻する。二重以上は低く相重なり、一面に各二佛を表はして居る。極めて優麗なる塔であるが、時代は後補の部が頗る多い爲、確言し得ない。宋代の大修補を受けたものと思はれる。前述の彌陀大石佛と此の塔は南方より見れば恰も法隆寺式の配置を示して居るのは面白い。寺傳によれば石佛は齊代で之と年代的に一致せず、兩者を結びつける適確なる根據を缺くが、偶然とするには兩者の位置關係が密接に過ぎて居る。兎も角法隆寺式配置が從來大陸に發見

されなかつた點よりして注目すべきであらう。

なほ當寺三門前に明徵君碑がある。著名なるもので唐代碑刻の一遺物である。

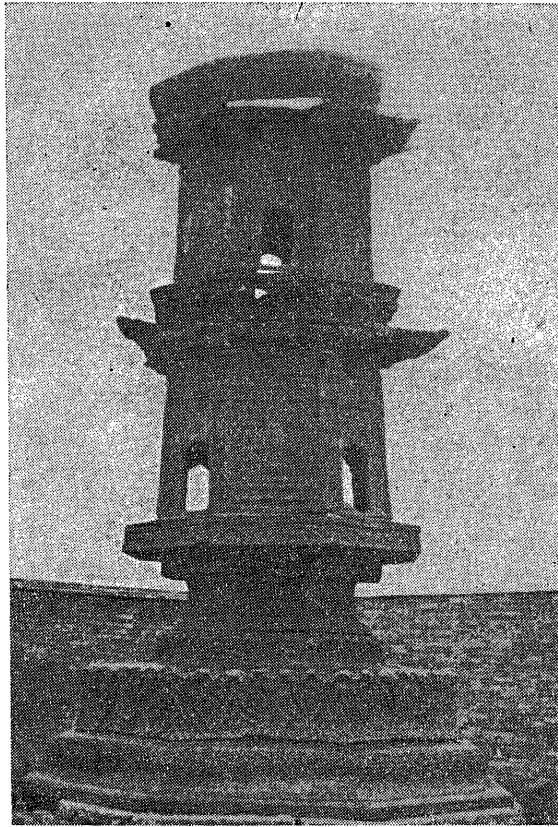
午後は附近の梁代古墳を一巡した。最初に蕭景の墓に至る。現在は一基の神道碑と有翼石獅子一體が田の中に淋しく残つて居るのみである。神道碑は石造にてゴマカラシヤクリ(フリーユーチングス)の圓柱に四角な碑銘を嵌め上には圓形の蓮辨を刻した笠を置きその上に小型の石獅を載せて居る。碑の銘文は左文字である。圓柱は中央部に紋様帶を廻らし、その上下でゴマカラシヤクリに精粗の別がある。此の圓柱と云ひ、有翼獅子と云ひ、西方文化の影響を強く觀取し得る點、從來說かれて居る所ではあるが、重大な研究對象たるべきものである。更に蕭秀及び蕭愔の墓を見る(挿繪第五圖参照)。前者は石獅一對破損せる神道碑、龜趺に乗れる漢碑式の碑一對、龜趺殘缺等があり、比較的散失して居らないのがよく、後者は一對の石獅及び龜趺を有する碑が残つて居る。此の碑は完全に保存されて居り、誠に貴重な遺物である。此の傍には更に石獅一對が田の中に淋しく残つて居る。之は蕭恢の墓と云はれて居る。全て梁代文化研究の好資料である。此の日快晴なれど暑氣激しく一同大いに疲勞を感じつゝ、午後七時南京に歸還した。

六月一日 曇 明日當地出發の爲、種々打ち合せ等あり、關係各所歴訪後、明故宮に赴き、過日調

査せしめた個所を一巡、更に隊長の請により、同所に駐屯せる○部隊將兵に對し明故宮の概略につき講演をなし、夜はその意義を知らざる爲に破壊される例多き故重要史蹟に説明立札を建てんとすの宣撫班の

意見に賛し、その原稿を認めた。

六月二日 曇 午前七時廿分南京發鎮江に向ふ。車中頗る混み困難を感じた。上海に歸還する迄、臨時松本班學生、西岡秀雄、通譯原口和夫と同行することとなり、一行は四名となつた。十時近く鎮江着、兵站部の好意で同本部宿舎に滞留を許されたので晝飯後早速見學に出かけた。町の東揚子江に臨む



第六圖 甘露寺鐵塔

小丘上の甘露寺に赴く。此處には著名なる鐵塔がある。八角塔で現在は二層迄を残して居るが、古くは五層か、と思はれた。脇に三層、四層と思はれるものが放置してある。本塔は石基段の上に立ち、波及び須彌山を表はせる基部の上に四天王を刻せる小框座を置きその上に塔身を立てる。各層共木造塔の細部を詳細に表はし、佛、菩薩、飛天等を刻して居り、大體棲霞寺舍利塔と同巧異曲のものである。年代は五代とも云はれるが大體宋代と思はれた。銘文は各層に見られるが、現在見られる所は僧名、施者の名のみで年號がなく年代は知り得ない。寺よりする眺めは頗るよく、眼下に長江の流れを望み、焦山がその中に浮び、北は江北の平野が地平の彼方に消え、南には低き山並が連つて鎮江の

町を圍んで居り中々雄大な眺めである。町はさして大ではないが、長江水運の一要地であり、近代的な工場もあつて、かなり近代嗅を帯びて居る。住民は多いが未だ殷賑と迄は行つて居ないやうであつた。

六月三日 曇 軍の好意で小蒸氣に乘じ、焦山に渡る。此の島にある定慧寺は著名な古刹であり、康熙、乾隆兩帝も行幸あり、御筆の碑が數基存して居る。此の地に砲臺ありし爲多少戦火を蒙つて居るが、重要な史蹟なりと雖も敵が利用せる以上、之が破壊されるのは當然で、之を利用した敵兵こそ文化の破壊者の名を負はねばならない。布袋、韋馱天、四天王を安置する三門を入り、大雄寶殿に至る。他寺の多く切妻造なるに比し、之は大棟の短い四注造りであるのが珍らしく思はれた。本尊は釋迦三尊、彌陀、藥師である。左右には十八羅漢が置かれ貫上に廿四體の天部像が見られた。背面には飄海觀音の塑壁がある。此の寺にはかの著名な瘞鶴銘がある。天監十二年愛育した鶴の死を傷んで建てられたもので文は華陽眞逸の撰、書は顧況或ひは陶弘景と云はれ、古くは磨崖碑なりしも宋淳熙中、清康熙中の二度河中に墜ち、五石に割れたと云ふ。現在は小亭を以て覆ひ、漆喰で固めてあるが、失はれた部分もあり、石のやつれ工合、書體、彫法よりして三種に區別することが出来る。勿論後補によるものであらう。

午後は町の西方なる江天禪寺（金山寺）に至る。之も名刹だけに頗る大規模な寺院である。塔に登つて見下すと僧坊の類が佛殿を十重二十重に取り巻き甕の波を現出して居る。此の塔も小丘上にあり、此處よりする眺望も甘露寺と同じく絶佳である。

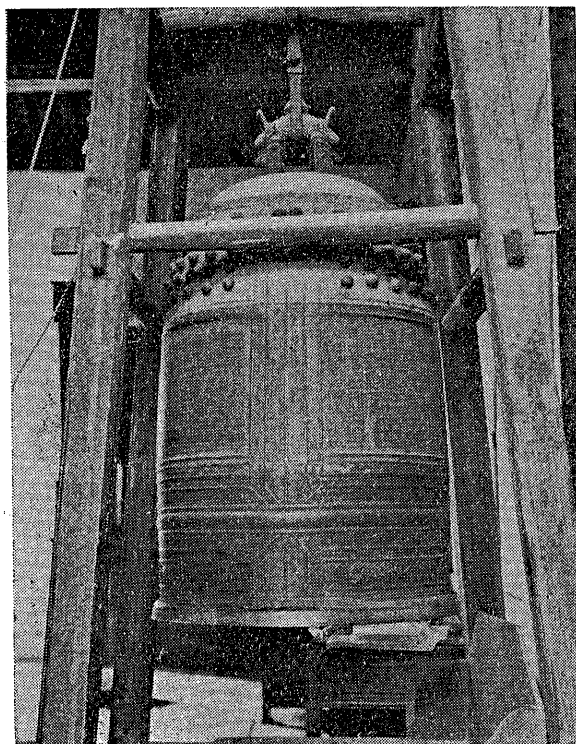
先づ彌勒殿に入る。布袋と巨大な四天王像があるが韋駄天はない。その代り大雄寶殿に韋駄天が祀られて居た。本尊は釋迦藥師彌陀の三如來で各臺座に廿四天を置いて居る。塑像の十八羅漢あり。又塑壁がある。飄海觀音及びその普陀洛山を表はすものらしいが寺では極樂園と稱して居る。佛壇の莊嚴具中には三瓣寶珠等密教系のものが見られた。

觀音閣は背後の小丘中腹にある。岩座を構へ倚像の觀音像を置く。背後に鳩及び水瓶柳葉ある所を見ると所謂マリヤ觀音の原形を傳へるものかと思はれ興味が深い。十字形瓔珞もなく、小兒像もないがその發生發展を考へる上に一つの重要な資料とならう。なほマリヤ觀音に關しては現在諸所に見られる送子觀音、同じく道教系の送子娘々をも併せ考ふる要があると思はれる。八角七重塔は小丘上に立つ。かなり大きな塔で極めて鈍重な感があり、あまり古からざる建築と思はれた。九輪はラマ式の中膨みのものである。各層五體の佛、菩薩、尊者等の像を安置する。塔下の岩窟に弘法大師遊學の古蹟と云ふものがある。今事變の生んだエピソードらしく傳説の發生を考へる上に注目すべきものがあつた。

金山寺門前に石敢當あり。又歸途にも一つ見られた。後者はクリークの突端にあり、水路より來る魔に對するものであり、此の地方の水路が重要な交通路である點から見て面白く思はれた。

六月四日 晴 十分なる時間なきを啣ちつゝ十時五十分鎮江を後に蘇州へ向け車中の人となる。今日はさして混まず、同車の將兵より徐州戰その他の戰功を聞き、又内地の状態を語つて激勵慰問する等

愉快に時を過した。鎮江東方には都天寺の塔が望まれた外、丹陽に二基、無錫西南に一基の塔が見えた。皆輓塔で古い形式に屬するものである。上海、南京、杭州方面には塔が多いが、青島以北に於いては殆んど車窓より塔は望まれません、且つ北支の塔は全く異つた形式のものが大部分である。四時三十分蘇州着、兵站指定旅館敷島館に入る。見學は中止し、宣撫班長に面會し、狀況を聞き見學上の打ち合せを遂げる。市内は全く罹災の跡なく、殷賑を極め、他所とは異つて姑娘の姿も多く見える。上海を除き日焼けせぬ顔を見るのは殆んど始めてである。聞けば事變前卅萬の人口が現在は却て四十萬に増加したとのことだ。成程と思はれた。行き交ふ兵士の姿を除けば事變の俤は何處にも見當らない。



第七圖 虎阜寺日本鐘

六月五日 曇、小雨 蘇州最初の見學地として市の西北にある虎邱を選んだ。此處には十刹の一たる虎阜寺がある。梁武帝の草創と傳へるが現在はかなり荒廢し、佛殿一字が虎邱の中腹に残つて居る外は輓塔一基と碑閣が存するのみである。佛殿には釋迦及び脇立の阿難迦葉以外之と云つた佛像もなく、塑壁も見當らぬ。併し此の堂内にあつて見逃し得ぬものは貞享四年の日本鐘である。元來現在の支那寺院には鐘樓がなく此の鐘も堂内に



簡単な臺を設けて吊されて居る。銘文によれば紀州名草郡應供寺の鐘であるが、文中、同寺の縁起を記せる中に「保延元年」の字句がある爲誤つて平安時代の鐘として巷間に傳へられて居たもので實は江戸時代の貞享四年の鑄造である。錢塘の人胡光墉なる者によつて奉納されたことが解つた。堂後の一段高き所に著名な虎邱の塔が建つて居る。八角七重の軀造で屋蓋、組物等細部は木造なりしも太平天國の亂



第八圖 虎阜寺七重塔

に焼け、殆んど失はれて居る。隋代の建立と云ふが再建されたものであらう。支輪に當る部に優秀な寶相華文を表はして居る。佛殿の直後には碑閣が建ち内に乾隆帝御筆の碑があり、兩側の龍文様は面白いものであつた。邱下には之も著名な劍池がある。顏真郷筆の虎邱劍池の四字が刻まれたと云ふが、現在見る所のもののは後世の追刻である。その傍千人石と稱へる大石上に八角の石幢が立つて居る。何心なく調べると後周顯德五年のものであることが解り驚かされた。刻まれた佛像も中々優秀なものである。

此處を辭して寒山寺に至る。詩に名高き此の寺も全く荒廢し見るべきものとしてない。僧達も唯楓橋夜泊の詩碑の拓本をとるに忙しい。軍人によく賣れる爲である。ゴチャ／＼した汚い町を抜け楓橋に登る。

大鼓橋形の小さな石橋で下を流れるクリークも水は濁り、唯緩く田の間を縫つて流れるのみにて、到底張繼の昔を偲ぶべくもない。満たされぬ思ひで歸途に就いたが唯氣になるのは寒山寺にある小鐘で伊藤博文公の撰文、杉孫七郎子の筆になり我國より奉納されたものであるが、甚だ貧弱なるのみならず、製



第九圖 虎阜寺石幢（後周，顯德五年）

作また拙劣で名土の名に於て寄進する以上抗日、侮日も起り得るのであらう。全く國辱であり、心すべき所であると痛感した。況や英米の大規模なる文化事業の多々存在するに於てをやだ。

歸路は戒幢律寺の門前を過ぎるので、立ち寄ることゝした。此の寺は珍しくも律宗に屬し相當な大寺である。大雄寶殿内には釋迦、藥師、彌陀の三尊を安置し、左右壁下には各廿體の菩薩天部の像を置く。本尊背後には飄海觀音の塑壁もある。佛殿の左方には五百羅漢を祀る堂があつて、五百體の等身大羅漢座像を置く。中にマルコポーロの像と云はれるマントを着し帽子を頭にした像も混つて居る。西歐人の渡來によつて與へられた影響の大なることが想像されて面白い。

蘇州には名園が頗る多いが、本日は西園、留園の二つを見た。支那式庭園の美しさは直ちに心に觸れ

るものはないが我國庭園と比較し、兩者の間に類似の點が屢々見出されるのは今後我々の注意すべき所である。



第十圖 千手觀音像 (戒幢律寺)

城隍廟は繁華な市街にあり、忠安王を祭る。多くの道教の神々が祀られて居るが、此の宗教がその構成を佛教に採り、同時に本質に於て古來よりの民間信仰と密接に結びついて居る點頗る興味深い。今後は我國人の之に關する研究が盛んになることであらうが同時に此の研究は容易ならぬものがあらう。元妙觀も市中にあり、その前は恰も淺草の仲見世を亂雜にした如き氣持がする。本殿たる三清殿は大建築でその中に祭られて居る元始天尊の像も極めて大である。

蘇州の第一日はかくして暮れ、八時近く宿に歸つた。

六月六日 曇 本日は城内北隅にある報恩寺に行く。俗に北寺と稱せられ、多くの佛寺は禪刹なるに此の寺は敎寺である。大雄寶殿には釋迦、藥師、彌陀の木彫大像を安置する。中尊釋迦の兩脇侍木彫阿難迦葉像は木寄法が我國とは全く異つて面白く、楔を用ひて居る點が目を惹いた。本殿の柱は我東大

寺大佛殿の如く、板を併せた卷柱で水抜孔があり、その礎盤は石鼓の形をした面白いものである。八角九重塔は堂後にあり、その配置形式は朝鮮羅原里廢寺に見る如き逆四天王寺式とも云ふべきものである。此の塔は廻縁等を除いては殆んど木造部分なく、高さと比較して幅が廣く、鈍重な感がありラマ式の九輪を上げ、近代の造立と思はれた。大體支那に於ける塔は古くは洛陽伽藍記等よりするも木塔であつたらしくその後次第に甃を用ふるに至り、木造部分が減少して行つた如くに思はれる。此の點後述の瑞光寺塔の如きはかなり古いものであらう。塔内には各層に佛像を置くが、多く破壊、亡失して居る。講堂は塔の後にある。釋迦、文殊、普賢の三尊を本尊とし、他に羅漢その他をまつる。庫裡に道教の石刻があつた。頗る珍らしいもので研究を要すべきものと思はれたが遺憾ながら十分なる調査をなし得なかつた。昭三老師の歡待を受け晝飯の饗應に預り、且つ自作の杖を贈られた。午後は開元寺に行く。唐開元二十六年諸國に建てられた開元寺の名残りであるが現在はかなり衰微して居る。地藏を本尊とする。寺後に無梁殿がある。石造建築で他にあまり類がなく興味深いものである。

瑞光寺は城内西南隅にある。現在頗る衰頹し寺には見るべきものが少い。併し大雄寶殿に宋大中祥符四年の銘ある石佛があつた。道を隔て、野原の中に建つ塔は一見の價值あるものである。甃塔で八角七重、破損甚だしいが古式を存し、木造塔をそのまま、甃に置き換へたと云ひ得る。出組、軒等の部分には木を多く使用し、肘木、斗にも古制が見られ、宋宣和年間の造立といふのも領かれる。内部の柱にも木

を用ひ、上方に綜を附す。十分なる調査の必要を感じた。

更に黄包車を驅つて孔子廟に至る。林に包まれ、森嚴の氣に満ちて居る。泮宮の額を掲げた門を入ると更に禮門があり、池を控え、之を渡れば宣門に達する。此處に平江圖石刻がある。宣門の右方に相並んで戟門がある。此處には有名な宋代の天文圖及び墜理圖の石刻があり之を入れれば奥に土壇の上に大成殿が嚴然と建つて居る。殿内には中央厨子内に孔子の神位を祀りその前に子思子、孟子、曾子、顔子の神位を祀り、更に左右に多くの先賢の神位を安置してある。境域は樹木茂り幽邃の氣に充ち世に喧傳されるだけに堂々たる廟である。歸途滄浪亭、可園の二庭園を見る。昨日午後より西岡、原口兩君には自由行動をとらしめた。

六月七日 曇 再度北寺を訪れ、大同塔址を見る。同寺の後園にあり近來迄二層を殘存したと云ふが、現在は唯土壇、礎石と見るべきもの、及び多數の瓦の破片が散亂せるのみである。甃の少きよりして木造塔であつたかと思はれる。

次いで双塔寺に至る。唐咸通年間の草創と傳へるが現在は宋雍熙中建立の八角七重甃塔二基を殘すのみである。この塔は手法全く同一にて約五十尺を隔て、立つ。各層瓦葺、内外部の梁、斗拱、軒支輪その他多く木を用ひて居るが極を出さざる爲一見總甃の如くに見える。九輪はラマ式ならざる古い形式に屬し七輪しかない。二塔の中心線より四十尺にして香爐の臺石あり、それより三十尺後方に佛殿の基壇

が残存して居り、礎石、石佛の類が半ば埋没して居る。明かに我國の藥師寺式配置を持つた寺であつたと思はれ、發掘調査の急務なることを認めた。

更に定慧寺に至る。禪宗の大寺である。四天王殿に入ると例の如く、布袋が正面にあり、韋馱天はなぐ左右に四天王を安置する。中支に於いては持國天は赤面にして持物は劍、增長天は青面にして琵琶、多聞天は黄面にて龍を握り、廣目天は白面にて寶傘をとるといふ極めて珍らしい像容の四天王が大部分である。次に地藏殿がある。地藏及び、その他小像を安置す。最奥に大雄寶殿が建つが、本尊は釋迦で阿難、迦葉の脇立があり、左右には波上に浮べる獸魚形の臺座に乗る十八羅漢がある。なほ壁面に小軀佛を嵌めて居るが印度式のもので極めて注意を惹いた。傳來を詳かになし得ないのが残念である。飄海觀音の塑壁も存した。

元妙觀を再度訪れた後、市中を見物し、宿に戻つて荷物を取り、午後四時五十分の汽車で一路上海に歸る。あまりに忙しい滞在とて、十分なる見學調査をなし得ず、蘇州に恨みの數々を残した。途中事なく八時上海着萬歲館に入り、松本班と合同した。

六月八日 雨 どうやら雨期に入つたらしい。畑部隊本部、三井等を歴訪し、杭州行の準備に忙しい。夜は塾員飴野政吉氏に招待され久し振りの御馳走に舌鼓を打つた。

六月九日 雨 豪雨を冒して杭州に向ふべく北站に行き列車に乗り込んだが、嘉興附近に事故あり、

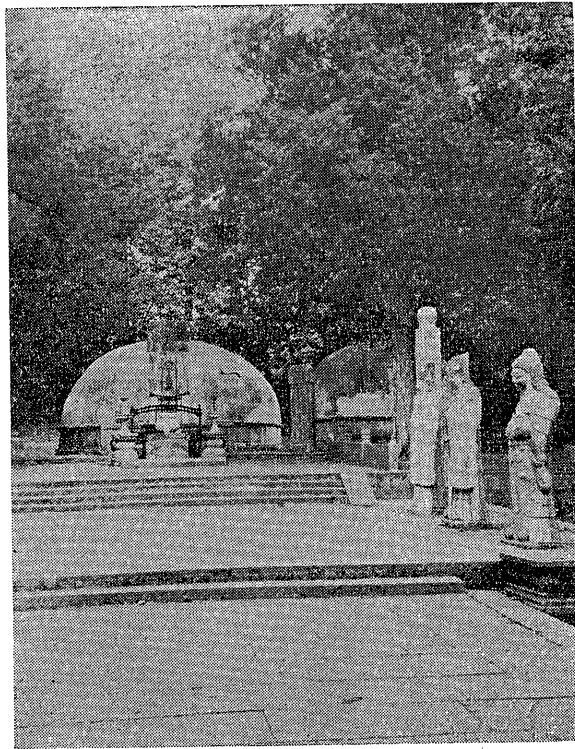
不通との報らせがあり、一日一本の列車故止むなく、本日の出發を中止する。全員休養とし、自由行動をとる。濕氣頗る多く心持が悪い。

六月十日 晴 事故も復舊したので松本班と共に杭州に向ふ。七時十五分北站發、嘉興迄は唯沃野の中を走り、支那の廣いことを嫌應なしに見せつけられる。松江、嘉興に共に二基の塔あり。眼鏡橋の如き形狀をなし漆喰にて固め彩色文様を施せる大形の甃墓が多く見える。京滬鐵路沿線には見受けない形式である。硤石にも塔があり、此の方面の塔は塔身細く各層の遞減率少きが特徴の如く思はれた。此の附近より低平な水田より轉じて高燥地となり、桑畑多く、樹木も増えて來た。杭州に近づけば山も見え出す。午後四時南京等とは比較にならぬ小規模な城壁に添つて汽車は杭州驛に着いた。兵站連絡自動に便乘を許され、兵站司令部、特務機關を歴訪來意を告げる。中央旅館に入る。杭州の市街は戰火を全く免れて居るが、案外中流以上の住民は歸還して居らず、町は頗る淋しい。西湖の風景は久しく穩かな景に遠ざかつて居た爲、内地を思ひ起させ美しく又懐しい。併しあまりに小規模な景は歸途に就く頃には飽きが來てしまつた。

六月十一日 曇後晴 第一に著名な岳飛廟を見る。世に喧傳され縷説の必要はあるまい。墓の基壇の十二支石刻が面白く思はれた。秦檜の像の鐵像なることも支那としては珍らしくない。

紫雲洞法雲寺も見たが異形の觀音像、華光藏主なる特殊の像あるのみにて後者も非常に研究心を唆ら

れたが僧侶との筆談通せず單に伽藍の守護神たることしか解らなかつた。共に像は近世のものであつた。雲林寺は大刹である。天王殿前の石幢一對、佛殿前の石塔二基は共に宋代の遺品で優秀なるものである。大雄寶殿は稀に見る大建築であり、長大なる柱に中途何等の工作なく、頭貫一本を通して居るのみ



第十一圖 岳 飛 の 墓

であるのは地震なき國とは云へ、少しく危険に非ざるかと思はれた。禪寺にて本尊は釋迦、阿難、迦葉の脇立あり、更に左右に藥師阿彌陀を安置する。皆巨大な像であるが、他と同じく清末を遡らざる作である。背面に飄海觀音の大塑壁がある。左右兩側には廿體の天部像、後壁下には十二體の菩薩像を置く。寺運頗る隆盛らしく見えた。總門内の岩山には石佛がある。磨崖佛は皆新しいが巖窟内には唐迄遡るか、と思はれる優秀なものもある。

法鏡寺は三天竺の一、俗に下天竺と云ふ。十刹の一として古來知られて居る。禪刹にて門前に宋初の石幢二基がある。大雄寶殿前に一堂あり、觀音をまつり、塑壁がある。大雄寶殿内には釋迦、藥師、阿彌陀を安置し十八羅漢を置く。道教系の眼光娘々もある。

法淨寺は三天竺の一中天竺と呼ばれる。布袋、韋馱天、四天王を置く天王殿、觀音及び廿四體の天



部像を置く一堂、千手觀音を本尊とする一堂が一線上に並びその後小丘上に藏經閣がある。道教系の神像もあり、大體三天竺は俗信仰の中心であるやうに思はれた。

三天竺の最後のものは法喜寺である。上天竺とも云ふ。三天竺は皆禪宗であるが、觀音を祀る一堂が必ず存し、下天竺を除いては之が本尊となつて居る。觀音を安置する堂には本尊の外、飄海觀音の塑壁及び觀音三十三化身を現はすと云ふ像が置かれて居る。その後の後大殿は矢張り觀音を本尊とし、その他五佛以下道教の神像に至るに迄多數の小像が祀られて居る。此の堂内に日本鐘があつた。高さ四尺、口径二尺八寸五分、池の間に四天王像を陽鑄して居るのは珍らしい。高所にある爲銘文をよく調査し得ないが天保五年の作で「南紀住御鑄物師秋武仙次源嘉忠作」とあり、又「天曜寺住侍僧正宗海造銘」とあるから紀州の鐘であつたことが解る。此の點蘇州虎阜寺の鐘も紀州であつたことが思ひ合される。然も同じく胡光墉なる者の奉納なることが追刻によつて知られる。何か手懸りはないかと思ひ、住僧と筆談すると、一老僧から、今より六、七十年前杭州の商人胡光墉なる者が我國より鐘十八口を購ひ來り、杭州附近の諸寺に奉納したと云ふことが解つた。恐らく明治維新の騷亂に乗じて買ひ集めたものであらう。後述する如くそれ等の鐘はその後續々我々の眼前に現れた。杭州郊外の頽れた土塀に我京都の近郊を思ひつゝ、歸途に就く。

六月十二日 雨 豪雨を冒して早朝出發。保俶塔に至つたが折角元代の造建と云はれる此の塔も民

國廿二年の重修に古制は破壊せられ、西洋風さへ加味されて全く無價值なるものとなつて居るのに一驚し憤懣の念を禁ずることが出来なかつた。今後他の塔を修理する時は餘程注意が必要であり、我々日本の學者が活動すべきであると痛感した。

塔の建てる丘下に磨崖佛がある。最近の修補の爲、見るべきものではない。

昭慶寺は律寺にて堂宇完備し、三天竺等の俗信仰から離れて然も立派に寺運を維持して居る。不意の來訪にも拘らず知客以下非常な歓迎で隈なく調査し得たのは愉快であつた。小規模な門を入れれば放生池を隔て、天王殿があり、例の如く、布袋、韋馱天、四天王を安ずる。次いで大雄寶殿が立つ。前面一間を吹き放しとした餘り例のない堂で釋迦を本尊とし脇侍は阿難、迦葉であり十八羅漢もある。堂後に戒壇があり、毘盧舍那佛を安置する。塑壁は見當らない。一直線上に並んだ之等の堂の左右には食堂、雲水堂、僧坊、客堂等が整然と配置されて居り、雲水の豚小舎同然の慘憺たる生活振り、住僧の簡素な日常を詳さに見學し、支那に於ける完備した寺院の實情を知り得たのは思はぬ收獲であつた。

雨に煙る西湖を横切る白堤、蘇堤に黄包車を走らせ、乾隆帝御筆の碑の立てる斷橋殘雪、平湖秋月等の名勝を恣まゝにしつゝ、雷峰塔址に至る。最近迄殘骸を存して居た、と云ふが今は木竹、雜草の茂れる小丘上に互軋の散亂せるを見るのみ。その向ひの淨慈寺は之又著名な五山の一である。この地の寺々は他と異つて寺運隆々たるのは流石昔より佛教の繁榮した土地ではある。天王殿には四天王はなく、代り

に二王が祀られて居る。その奥の佛殿には釋迦をまつり、最奥の大雄寶殿は釋迦を中心に藥師、彌陀の三尊を安置する。釋迦の脇立は他の殆んど全部の寺と同様阿難迦葉である。左右兩側には三段に計九十體の天部像が祀られて居る。堂内に二體の石佛があつた。一は大唐咸亨二年十月の背銘がある釋迦、文殊、普賢の三尊佛であるが嘉慶廿四年の重修銘に見る如く、後補の爲に甚だ像容を損んじて居る。一は一莖三尊佛なる所が面白く六朝末の作と思はれた。此の寺は又道元禪師の遊學の地であるといふ。寺後の山中に浙江省政府要人の用ひたといふ完備せる防空壕があつた。西湖を一週して夕刻に戻る。

六月十三日 雨 本日は廟を主として見る。道教の研究の必要にして且つ困難なるべきを益々感じた。岳王廟は岳飛初瘞の所と云ひ、冤死せる岳飛及び一族の像を祀つて居る。廟の陰鬱な氣分は何處か物凄く、怪奇的な夢幻境にさそはれる心地がする。此處にも日本鐘が見出された。紀州上那賀郡粉河の福生寺のもので明和四年の鑄造である。

次いで廣福廟、救命王廟を見る。經文として般若心經、金剛經、法華經、無量壽經等の用ひられて居るのに今更ながら混淆の激しさを感じた。

官巷口、新民街の町角に日本鐘の置かれてあるのを見出した。空襲警報に用ひられたものと云ふ。日本鐘の優秀さがかゝる面白い場合に示されたわけである。播州龍野の常照寺の舊鐘で、寶永元年の鑄造にかゝり池の間には日、月を鑄出して居る。矢張り「錢塘弟子胡光墉敬助」とあり、從來の日本鐘と共

に彼の手によつて輸入されたものである。浙江流通圖書館にも日本鐘ありと聞き、その所在地鎮海樓に赴く。高さ約三尺五寸、徑二尺六寸、寶曆九年の銘があり、池の間には二間に銘文他の二間に天神宮の三字を鑄出す。播州望理郷の天満宮の鐘で、神社の鐘として面白いものである。やはり胡光墉云々の後刻がある。

城隍山に登る。錢塘江を見下し、雄大な眺望である。江の對岸は未だに敵地である。此處には大きな廟がある。一は大歳廟にて日本の半鐘あり、播州加東郡椅鹿寺のもので、文政四年黒谷村の島屋彌兵衛奉納の銘文がある。他は城隍廟といひ、その鮮神殿に又日本鐘がある、備前上道郡妙法寺のもので、文化九年に改鑄せる旨の銘文がある。此處では祭典の状況を見ることが出來た。第三の廟は東嶽廟にて此の大殿には塑壁があり、地獄極樂を表はし閻魔十王、午頭、馬頭、淨玻璃の鏡等が見られる。道教が佛教の影響を受くるもの多きを察せしむると共に、此思想が支那一般の信仰と爲れるを窺はしめ、佛道兩教より受けし影響が我國民の間に浸潤せるものまた大なるものがあり、必ずしも佛教よりのみならず、却つて道教に負ふ點もあるを察せしめる。宿に戻れば既に八時に近かつた。

唐揚惠之の作れる塑壁を遺存する、といふ保聖寺の所在が如何に調査しても見當らなかつた外、見るべき所も多く残つて居るが先を急ぐ旅故、明朝上海に戻ることに定めた。

松本班は踏み止り、現在續行中の古蕩石器時代遺跡の發掘を續けることゝなつた。

六月十四日 雨 豪雨を冒し午前七時三十分杭州發歸還の途に就く。窓ガラスの破損した客車内は折柄の雨に水浸しとなり、あまりいゝ氣持ではない。嘉興南方僅かの所、線路際に四角七重の甌塔があった。大分破壊されて居るが四角である所が珍らしい。松江附近では水田が近頃の雨續きに湖の如くなつて居た。五時近く上海安着、列車襲撃事件も時にあることながら常に無事であるのは有難い。病氣の爲殘留した松本班保坂三郎君に迎へられて宿に入る。

六月十五日 曇 大連汽船にて青島行の切符を買ひ、領事館警察部にて蒐集參考品の積み出し證明を貰ふ等北支行の準備をする。夕刻商務印書館等で書籍を買ひ集める。

六月十六日 雨 三井の好意で戰跡見學に出かける。相憎く雨の爲、大場鎮、南市、龍華方面には行かれなかつたが、市政府に赴いて内部を隈なく見、激戰の狀を偲び、吳淞埠頭に至り、敵前上陸の跡を見る。未だ破壊された家等多數残つて居り感慨深い。吳淞砲臺に上れば海の如き揚子江は雨に烟り、御用船が堂々と浮んで居る。足許には破壊された大砲が轉つて居る。之も激戰地たる江灣競馬場の廢墟を経て、陸戰隊本部の前から一氣に租界を突破し、豊田紡に至る。既に復興の氣漲つて居るのに意を強うした。午後は又領事館、商務印書館等へ行く。

六月十七日 雨 午前十時保坂君が病氣の爲歸國するので埠頭に見送る。畑部隊本部、特務部に廻る。北支行の手續きをする爲である。午後博物院を見る。小規模ではあるが主として自然科学關係の博

物館で要領よく陳列されて居る。考古學關係のものにもよいものがある。殷墟發見の文字ある鹿角、骨鏃等も面白く、優秀なる六朝佛數體、ガラス製玉類、馬鐸等にはそれ／＼興味が深かつた。特記すべきは鈕は一個であるが我國の細線鋸齒文鏡に酷似せるもの三面ありしことにて而もその三面に文様變遷の跡が窺はれることであつた。甘肅省發見の彩色土器もあり、古錢もかなり蒐集されて居た。

六月十八日 曇後晴 正午出帆の大連丸に乘じ、青島に向け、上海を後にする。兩岸は堤とてもなき廣漠たる平野、ブロードウェイマンションや市政府の建物が江の曲折につれて右に左に見えるのが面白い。飯田部隊長の武勳を傳へる飯田棧橋、敵前上陸地點等の戰跡が繪卷の如くに繰り擴げられる。一日昨日見た吳淞砲臺を後に揚子江に入り、いつしか之をも出て、船は既に支那海に浮んで居る。約三時間にして海水は再び綠色をとり戻して來る。北上する爲、長崎から來る時よりはずつと早いのである。急に非常な氣安さを感じ、夜も早く床に就く。

六月十九日 晴 海穩かに水は青く、一天雲なき快晴、永らく雨期の陰鬱な空模様と濁つた水を見續けた目には眩いばかりに心地よい。山東の鋸の如き峻嶺が碧空に聳立するのが見え出した。午後三時半敵の閉塞船の間を抜けて青島埠頭に横づけとなる。町は一色の赤屋根、樹木多く、青空に映えて『美しい所だ』といふ印象が深い。宿をとつて明朝出發故、市中を一巡することゝする。敵の暴狀を見んが爲、一例として大康紗廠を訪れた。實に徹底的な破壊であり、その餘りに計畫的なるに一驚した。共産

黨及び某國の使嗟ありて初めて出来る仕事であらう。舊獨逸軍の旭山砲臺に上れば周圍の峨々たる山々に圍まれた郊外の綠野が展開し、美しい中にも要害の地たりしことが知られる。大戰當時の我軍の奮戦を偲んで後、海岸の砲臺公園、海水浴場、日本人町を一巡、最後に觀象山に上り、夕暮の青島を一望の裡に改めた。此の地の支那人は純朴にて中支のそれの如く近代的な嫌味がない。纏足は少ないが、髪の毛合、服色迄異つて居るやうだ。特に服色は中支の殆んど青一色に比し、北支では黒、白、赤等も用ひられて居るのが目についた。

## 六月廿日 曇

青島には見るべき所が少ない故、午前七時膠濟線に乗じて濟南に向つた。山東は古代支那文化の一中心である。田單火牛の計に名高い即墨、周代に起り、倭寇の爲亡びた不其城等が城陽驛の附近にあるが車窓より偲ぶ外はない。右に平野、遠く山を望み、左は膠州灣に沿つて進む。鹽田も見られる。田は全く見えす、民家の形も變り、北支に來たとの感が深い。クリークもなく、水牛もなく、代りに馬や罌粟が多い。墓の土饅頭の上に土塊を乗せたものがある。之は中支にも見られるが、一種のマジックであらう。膠州より海を離れ、太公望で名高い渭水を渡り、次第に山地に入る。返りのある屋根は見えなくなつた。丘陵の土止めとして薄い石を磚の如く積んで居るのは、九州遠賀郡の古墳石室と同巧であり注意を惹いた。

太公望の封せられた故地と傳へる淄河店には驛東南に四基の大古墳が見られた。齊の威王、宣王、湣

王、襄王の墓と云ふ。調査して見たく思つたが覺束ぬこと、他日を期した。嘗て見ない大圓墳が屢次車窓から望まれる。張店は高原と云つた感じがする場所で四方山に圍まれて居る。淄川炭坑は此處から入る。此の沿線には一部落が堅固な土城で圍まれて居るものが多い。匪賊多き爲であらうか。此の邊りには珍らしくも鴉が多い。

濟南に近づくに従ひ、上部に穴をあけた漢碑式の碑が多く見られた。午後九時、運よく遅延のこともなく濟南に着いた。併し此の十四時間の旅は決して樂ではなかつた。シートは平らな板にすぎず、窓は高く、甚だしく暑い上に混み、苦力の惡嗅は鼻をつき、大いに疲勞を感じたのである。中支でも同様であるが日本時間を用ひる爲日が長く、九時と云つても漸く薄暗くなつた許りである。入市は嚴重を極め、驛頭にて證明書を貰ひ漸く宿に入る。

曲阜、泰山その他山東には見るべき所は多いが現在の治安状態では悉く危険とのことに大いに失望した。青島は涼しかつたが此處は又暑い。

六月廿一日 晴 特務機關に來意を告げた上千佛山に登る。支那駕籠に揺られ、寺に至る。山腹に小堂が相並び、觀音、釋迦、文殊等を祀つて居る。場所柄泰山娘々の信仰が盛んで、關帝を祀る堂もあり寺と廟とを合した感がある。著名な石佛があるが、皆近世の修補を受け、塑土を以て覆はれ、俗惡な彩色を施されて見るべきものがない。併し塑土の剝落した下には六朝風な衣文を見ることが出來た。此



處よりの眺望は素晴らしい。眼下に濟南の町が横はり、大黄河が輝き、その先は地平に消える大平野が展開し、鵲山以下の小山が大和三山の如くに浮んで誠に雄大極りない。濟南を知る爲には先づ此の山に登る必要がある。山下の清和尚の墓を見る。清代のもので風變りな塔であつた。町に歸つて濟南事變の忠魂碑に參り、支那軍に焼かれた領事館を過ぎ、晝食をとる。偶然本塾醫學部の鈴木三郎、菅野信一兩軍醫に會ひ、臺兒莊激戰の體驗談を聞くを得た。慰問の辭を述べ、時間もないので舊城内に向ふ。大明湖に至り、畫舫を浮べて北極廟に至る。玄天上帝以下多數の神像がある。骸骨の首飾をつけた像數體あり、ラマ教の影響にあらずや、と思はれた。伽樓羅の如き像も見られた。眼光娘々は此處にもある。

轉じて濟南圖書館を見る。書庫は灰爐に歸したが畫像石、石佛の類は猶存して居る。併し小形なものは掠奪され、臺座のみを残して居るものが多數見られたのは遺憾である。一刻も早く適當な措置のとらるべきことを熱望しておいた。省政府、焼亡した韓復榘の住宅、支那には珍らしくも美しき水を多量に湧出する趵突泉を見、町に拓本を買ひ求めて夕刻歸途に就いた。

六月廿二日 曇 午前八時十分濟南を後に津浦線を北上する。間もなく黄河を渡る。皇軍の一大目標たりし大黄河、今や大鐵橋の修復も成らんとして居る。堤防決潰の爲水量は少い。黄河を渡れば又果しなき平原が続く。樹木はかなり多い。畑は細長く數町に及ぶものもある。山東と同じく多人數による耕作はなく、一家族位が働いて居る。牛馬が用ひられ、犬が多く飼はれて居る。纏足の女も見え、赤い

模様のある靴が見られる。平原北方には八角七重の甃塔があつたが中支と比較して塔は極めて少い。次第に泥製の家が見えて來た。

この線の汽車は客車もよく、速力も早く、快適な旅であつた。午後八時、天津に着いた。イムペリアルホテルに入る。天津附近にて、墓の望頭石兼地境と思はれる頭に擬寶珠形又は圓形を附した石柱が多数見られた。三寶院古圖に鳥頭形境界柱のありしことが思ひ合される。

六月廿三日 晴 午前十時四十五分、快速列車にて北京に向ふ。途中は極めて變化なき平野にて昨日通過した津浦線沿線と同一の風景である。北京近く遙に山脈の連なるを見る。零時三十五分早くも北京着。東單牌樓の富士屋ホテルに入つた。北京の第一印象は京都を思はせた。何處となく落ち着いた古都の香がする。早速大山班の大給尹君が來てくれたが、矢張り懐しいものである。夕刻大山柏氏が來訪された。夕食を共にし、兩班の苦心談、自慢話に花が咲いた。東安市場附近を散歩する。夜も平常通り繁華な北京を見て、中支の荒廢した状景を見馴れた我々は何かそぐはぬものを感じた。大山氏の旅館に赴き殷墟の發掘品を拜見して歸る。

六月廿四日 曇後晴 大山氏と故宮見學に出かける。所謂紫禁城である。東華門より入り大和殿、中和殿、保和殿を一巡した。宮城の正殿で善美を盡したものはあるが感心すべき點は殆んど見出し難い。唯、規模の雄大なる所は我國のもの、及び難き所にて、支那人が我國のよさを理解することが出來

ず、唯輕侮の念を起すのも尤もと思へた。之は今後凡ゆる點に於て注意せねばならぬ所であらう。殿中には舊調度が數度の内亂の際掠奪された爲、熱河離宮より移されたものが多く飾られて居る。

次いで武英殿に至る。陶器、玉類が陳列されて居るが、形體の大、贅を盡したものは見られるが質のよさに感心するものは少い。或ひは南方に送られてしまつたのかもしれない。脇には有名な香妃の傳説にまつはるトルコ式の浴室が残つて居る。

中央公園を漫步した後、琉璃廠の骨董屋街を見た。偽物が多く、よいものは寥々たるもので噂さには聞いて居たが淋しく思はれた。

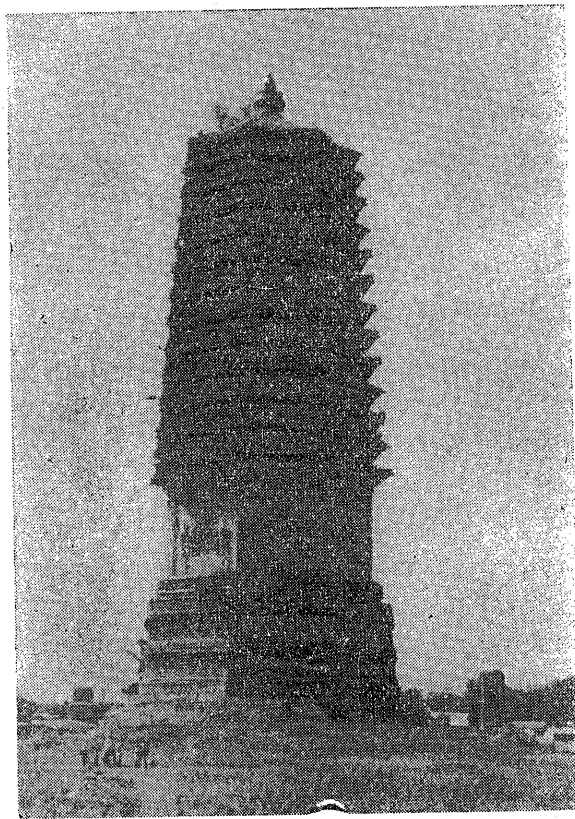
六月廿五日 晴 大山班の映畫班が撮影に出かけるのに同行、トラックにて先づ西郊の永安萬壽塔に行く。途中駱駝の列を多く見る。この塔は明萬曆年間の造立に係る巨大な八角十三重塔である。軒の部分を除く外殆んど總軛造にて普通の塔とは著しく形が變つて居る。即ち軛積み三段の基壇上に腰の部分があり、極めて複雑なる裝飾を施し、天部等の小像が附加されて居る。その上に塔身が乗る。塔身は各面中央に花頭窓形の出入口を設け、その左右に塑造の菩薩、天部、僧形等の像を附して居る。かゝる點迄塑像の用ひられて居るのは頗る面白いが、大部分は破損し木心のみを残せるものも見られる。屋蓋は各層相重なり、大體我國の十三重石塔を見るが如くである。九輪はラマ式のものである。此の塔の附近には古く慈善寺と云ふ寺があつたと云ふ。現在塔は荒地の中にポツンと立つがその北方に當つて

土壇あり、小形の礎石も見られ、若し之が金堂址とすれば此の塔と共に四天王寺式の配置が考へられる。

更に天寧寺に向ふ。略同大、同形式の塔がある。彫刻塑像は此の方が優秀である。塔の南に金堂があ

り、彌陀を本尊とする。かなり荒廢して居た。配置は例の逆四天王寺式とも云ふべきものである。我國飛鳥、奈良時代に見られる配置形式は既に述べた如く、大體現在の支那にも見られるのであるが、之が我國のそれと如何なる關係にあるやは速斷し得ない。

次いで白雲觀に至る。勅建であり、道教の總本山である。その爲か、如何にも落ち着いて他の道教寺院の如く俗惡ではない。整々たる配置は極めて好ましい。車を返して城内に入り町を抜けて今度は東方城外の東嶽廟に赴く。七十六司なるものがある。人間の凡ゆる事象を支配する七十六の神々であるが、その司る所を一々群像によつて表はして居り、同時に人世の百般に互つて居る點、如何にも支那らしい面白味がある。住僧の居室に入り、種々筆談し得る所があつた。道々石敢當數基を見る。中支と異なる所なし。頗る暑い日であつた。



第十二圖 永安萬壽塔

夕刻映畫班を残して大山班は歸國の途に就かれたので正陽門驛に送りに行く。偶然今春西洋史學科を卒業して此の地に就職した永野浩三君に會つた。夜は支那芝居を見る。

六月廿六日 雨 北海公園を見る。なか／＼美しい。白塔から眺めた北京は一面綠に蔽はれ、森の都の名に相應しく、見下せば紫禁城の黃釉の甕が烟つて居る。午後は蘇州胡同の骨董屋を見、偽物の研究をする。之も又十分研究する價值がある。

北海公園の中に極樂世界と稱するものがある。寶形造四方一間吹き放し、清初の特徴たる青系統の彩色を施した堂内に大きく須彌山が築かれ、頂上に大日、四方に五佛を置き、その他菩薩像多數が配されて居る。一種の塑壁と云ふべきものであらう(挿繪第十三圖参照)。

從來塑壁は屢次現れたが、之は塑土を以て淨土變の如きを表はすもので、我法隆寺五重塔の釋迦八相も此の一種と見てよい。傳説によれば唐代に楊惠之なる者が始めて之を案出したと云はれる。我々は此の楊惠之の作と傳へられる杭州保聖寺の塑壁を不幸にして見ることを得なかつたが、大體古くは須彌山を表はしたものであり、次第に他の淨土を表はすにも用ひられ、我國に傳つては法隆寺釋迦八相となつたのであらう。我國に於てはその後發展を見ずして終つたが、支那には現在迄引き續き行はれ、この北海の如くに須彌山を表はすもの以外に彌陀淨土、或ひは觀音の普陀洛山等は表はすものが盛んに行はれるに到り道教にも影響を與へて杭州東嶽廟に見らるゝ如きものとなつたのである。

七月廿七日 晴 朝大同行の許可證を得る爲寺内部隊本部を訪ひ、更に宮城内の文華殿を見る。書畫には見るべきものはないが、銅器、土器の類には優品、珍品があつた。馬、竈、家等の明器、鐵製五星鏡以下鏡類、春秋時代の人物畫甌、壽春出土銅尺、三角形銅器等は興味を惹いた。

更に故宮博物院の外東路を見る。内廷の一部で太上皇の居所であつたらしい。唯廣いのみで依然感心すべき所はない。後宮の様子は面白く思はれた。午後六時宿に歸る。

六月廿八日 晴 稍胃腸を害したので休養す。

六月廿九日 曇 休養

六月卅日 晴 休養、班員清水をして歴史博物館を見學せしむ。

七月一日 晴 休養、班員清水萬壽山を見學す。

七月二日 晴 班員清水をして雍和宮を見學せしむ。夕刻漸く恢復したるにより、東安市場附近の骨董屋を一巡した。

七月三日 晴 明日大同に向け出發するにつき一日休養した。

七月四日 晴 午門にある歴史博物館を一覽する。第三室の唐大中三年石幢、唐代墓誌四十五、北齊の造像、第四室の河北省鉅鹿發見の宋代寺院址出土遺物その他各地發見の考古學的遺物第六室の定縣開元寺、唐代壁畫殘片、安陽出土品、第八室の銅器、玉類等、第一室の清代文書、調度類が目についた。

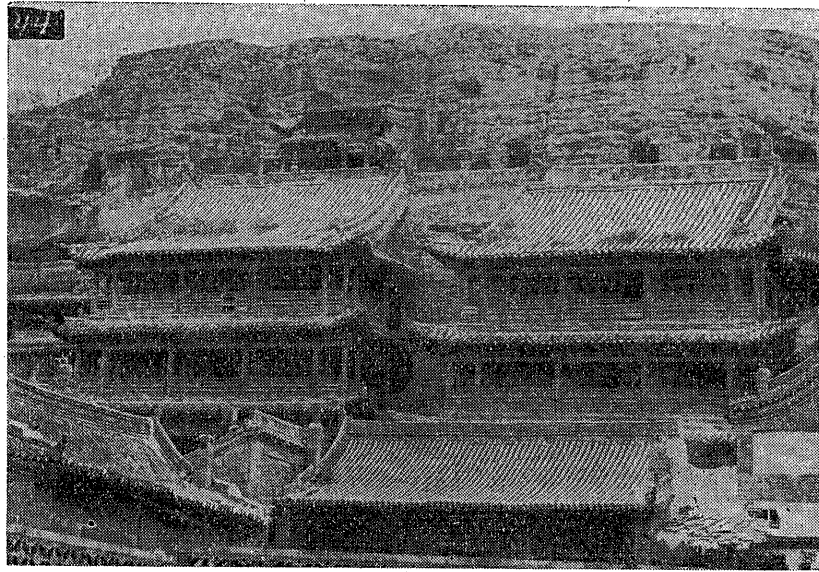
中でも北齊天統四年の石佛臺座兩側に表はされた人物のマントの如きものを着し、或ひは折襟服の如きを装つて居るのが當時の服飾研究上面白く思はれた。

午後四時廿分、北京發、一路大同に向ふ。南口よりいよ／＼山にかゝる。居庸關、八達嶺の嶮である。峨々たる山々も思ひの外青々として箱根越の如き心地がする。併し又よくも此の地であるの輝かしき戰勝をかち得たものと頭が下る思ひがする。大小の長城支脈が現れて来る。短時日の修復で名長い八達嶺トネルを抜けると風光は一變し察哈爾省の高原が展開する。後には長城が山を縫つて居る。漸く高原に夜が來て初めての夜行列車に滿洲事變當時の襲撃事件の話が一しきりはづんだ。十一時半張家口に着く。此處を出てより夢路に入る。

七月五日 晴 早朝の陽を受けて輝く城壁を望みつゝ大同に着く。朝食後〇〇兵團を訪れ黒田少將閣下にお目にかゝり、來意を告げると多忙な時間を割いて熱心に援助を約された。

午前中は北側城壁下で土器片を採集し、又玉帝廟を見る。どこか鄙びた感がする。像も極めて拙い。零時半迎へのトラックに乗り、直ちに雲崗鎮へ向ふ。町の西方の小山を越え、河に沿ふて進む。輜重隊の演習に出合つた爲、豫定より遅れ、三時過に至つて楊柳に囲まれた雲崗鎮が見え初めた。守備隊は某將軍の別荘と稱する家にある。隊長有川少尉は大いに歓迎して下さつた。水野清一君三上次男君が長く滞在して居た、とのことである。

少憩の後早速石窟東區の見學に出かける。寫真に見馴れた像が今日の前にある。矢張り實物に接して初めてピッタリ來るものがある。夕飯後には散歩がてら西區を簡單に一巡する。此の地は河を挟んで岩



第十五圖 雲崗石窟寺全景

山の絶壁がそゞり立つ狹隘の地であるが、古くは重要な交通路が存したのであらう。夕景は流石に壯大なものがあつた。大氣の澄明なことは驚く許りである。夜は明月であつた。此處の涼しさは又格別氣持がよい。

七月六日 晴 早朝より西區を見る。石佛寺も此處にある。正午頃一覽を終る。今回の舉は概觀して大勢を見るにある。細密な調査を行へば今次旅行の全日程を費しても十分とは云ひ難い。午後兵一名を貸與され、手の届く範圍内の拓本をとり、且つ寫真撮影をなす。

此の石窟を一見して第一に驚いたのは後補多きことであつた。石質にもよるが面部等は破損が甚だしく後彫り、又は塑土の補修が施されて居る。俗悪なる彩色を加へられたものも少くない。之には大いに失望した。殊に大露佛以下少しく大形の像は悉くと云つてよい程後の手が入つて居り、その顔面に於いて著しい。光背、衣文等と



比して全く彫法を異にして居り、且つ小像にして舊態を留めるものと比較すれば(口繪ニ参照)疑の餘地がない。又數體の大佛にあつては何時か塑土を以て覆はれたと見え木心を支へる爲の穴が隨所にあけられ慘澹たるものがある。大形の像には玉眼を嵌入せるものが多い。之も後の附加物であるらしく、腫の部を眼瞼外に及ぶ程大きく圓形に切り取り、玉眼を入れた後周圍を塑土で固めて居る。

細部では東區窟内大佛の右脇侍の寶冠に獅鬣を附した點とか、人字形束、窟内壁面に現された建築物の肘木の中央に佛像を刻したもの、小龕に多く見ゆる法隆寺金堂のそれに酷似した天蓋、小龕内天井の文様、等興味深く思はれ、又挾膝像多きこと、法隆寺金堂本尊に酷似せる像多きこと等一般に云はれて居ることながら一しほ強く感ぜられた。大露佛も面部胸部等は後補磨損が甚だしいが、その光背は見るべきものがある。

なほ石質上、窟入口上部の破壊崩落したものが多數ある。かゝる點の修理、保護が緊要であると思はれた。

午後四時輜重の自動車隊に便乗し、大同に戻る。黒田兵團に挨拶に行くとき閣下より華嚴寺を見るべしとの助言あり同時にサイドカーを貸與されたので早々に此處を辭し、先づ上華嚴寺に至る。

此の寺はかなりの巨刹で寺誌の類あるべしと思ひ、努めて見たが遂に得られなかつた。巨大な大日を中心とする五佛を本尊とし、六體の脇侍菩薩、四天王、廿體の天部像を安置する。新しいものではある

が、極めて優秀なる像で一驚した。之も後述の下華嚴寺諸像が存する爲であらうか。ラマ教の影響強く三角形の臺座、光背、壁畫等隨所に窺はれる。

偶々今日は寺の大祭にて境内には芝居もかゝり、且つ事變一周年の祝賀も兼ねて居ることゝて非常な雑踏であつた。殊に若い姑娘が多數道の兩側に着飾つて並んで居る。初めは訝つたが、聞く所によると古く此の寺の祭りに當つて若い娘を門前に並ばせ婿取りをした習俗の名残りであるらしい。

次いで附近の下華嚴寺を見る。大きな金堂の中に三體の如來像、多數の菩薩僧形像、四天王等を置くが、悉く我藤原時代の像を見る如き立派なものであるのに驚嘆した。宛然興福寺邊りに遊ぶ心地がする。皆相當な大像であり、かゝる優秀な像を一堂に見得る所は我國にも多くない。

堂は上華嚴寺の本堂と同じく後、側面を頭貫の高さ迄軌積みとした特殊なもので遼代の建築と傳へられ、支那側の調査報告も出て居り、今後も大いに保護を要するものと思はれる。

夕闇の中を九龍壁を見に行く。九龍壁は北京・北海にもあり、照橋と稱する一種の壁面に陶製の龍文様を附したもので、寶珠を追ふ九匹の龍が表はされて居る爲この名がある。此の地のものは構圖は遙かに北海に優るが陶の質は劣るやうに思はれた。事變一週年記念の支那人提灯行列の波を分けて宿に戻ると十時であつた。山西は抗日の本據と云はれるが此の大同は極めて平和な氣に充ちて居り、人心頗る安定して居るやうに見受けられた。

七月七日 晴 事變一週年を此の大同に迎へる。午前七時廿分汽車にて北京に向け歸路に就く。雄大な高原地帯を一氣に突破し、張家口に着く。途中羅文皂附近長城の遙かに續き、山を越えて消ゆるのを見る。孔家莊構内では驛の一小舎の腰に石敢當を箆め込んで居るものがあり、面白く思はれた。

張家口以東は砂岩質の岩山が連つて頗る暑苦しい感がする。この附近穴居の家がポツ／＼見える。又極めてよく耕作されて居るのには驚いた。人家は殆んど目に入らず何處から來つて耕作するのか、疑問にさへ思はれた。懷來には多數の幌馬車があつた。側面に窓を開け、彩色が美しい。此の彩色はちよつと豫想しなかつた所である。再度八達嶺を抜け、居庸關の嶮を馳せ下り、平野に出づれば急に暑さが身に泌みる。平野を一走りして汽車は午後六時四十分北京に着いた。

豫定の日數も残り少いので明朝滿洲經由歸國の途に就くことゝした。

七月八日 曇小雨 午前七時廿五分北京發天津に向ふ。途中無事天津着、午後は三井の人々と市中を一巡する。舊城内に入つて支那街を一覽し、總站に至り、更に北寧、津浦兩鐵路局の前を通つて、北寧公園を見る。此の附近未だに我爆撃の跡を微かに窺ひ得る。事變當時の在住者が居られたので詳に話を聞くとが出来た。伊太利租界の状態を見て、舊露西亞租界を抜け飛行場に至り、引き返して英吉利租界に入る。何と云つても此處と佛蘭西租界が一番美しく整頓して居るが上海で經驗した如く租界の氣分が最も嫌なものである。大連汽船埠頭を見る。白河は極めて狭い濁つた汚い河である。次いで南開大學

を見る。形勝の地を占めかなり整つたものであるが、敵の根據地となつた爲我砲爆撃を受け、完全に破壊されて居る。圖書館の藏書中には貴重なものが多かつたと云ふことである。此處より日本租界に戻り、夕食後午後十時四十五分の汽車にて奉天に向つた。

七月九日 曇後晴 山海關の税關は簡単に濟んだが、朝四時と云ふのに起され氣持が悪い。滿洲國に入つたのであるが、此の附近はすべてのものが北支の延長と見て差支へない。溝帮子附近より、家に茅葺き、切妻造で傾斜強きものが多くなり、聚落の様子が日本に似て来る。却て中支に近い様子である。奉天近く大平原となる。

午後零時半奉天着、乗換への時間を利し日本人町から舊城内を自動車で一廻りし、新工場地帯をも見た。支那町は流石に田舎の感が深いが、新市街は滿洲國の新興都市としての力強さがあり、整然として居る。博物館も北陵も見る暇なく、二時廿五分鳩にて大連に向つた。左手山、右手平野を望み、渺々たる曠野を快走する。關東州境より山嶽地帯を縫ひ、八時三十五分大連に着いた。中央ビルホテルに入る。遂に我々は戦地を離れたのである。

七月十日 晴 かくして我々は任を果した譯であるが、丁度通過地に當る爲、附近を見學せんと思ひ、十三日の船にて歸國すること、し本日は旅順に向つた。先づ關東廳博物館に至り、島田貞彦氏に面會した。丁度日曜なりしもわざわざ出勤され、案内の勞をとられた。館内を巡覽しその系統立つた懇切

な陳列に島田氏の努力のよく表はれて居るのを愉快に思つた。館はさして大ではないが、滿洲支那の遺物は大體揃つて居り、一通りの概念を得ることが出来る。特に陶瓷器は寧ろ北京の武英殿に優るものがあると思はれた。約二時間にして辭し、氏と共に戰蹟を一巡した。白玉山、東雞冠山北堡壘、水師營を見て遙かに往時を偲び、夕刻大連に歸る。島田氏を同道し、夕食を共にしつゝ、夜更け迄快談した。

七月十一日 晴 本日は大連市中を見る。序に最近發見された綠山貝塚を一見した。かなりの高所にあり、大連港を脚下に望む勝地で岩山の覆土少き所に僅かな貝と土器碎片を見ることが出来た。

引き續き滿鐵圖書館を訪ひ、館長の好意で金州に走り南金書院の三宅俊成氏を訪ふ。同氏は熱心なる研究家にて小規模ながら郷土館を持たれ、同所及び自邸に多數の石器、土器、瓦甎類を所藏して居られた。石器數點及び著書を寄贈されたが、此處に記して感謝の意を表する。彩色土器のよいものを祕藏して居られた。

氏の東道で更に岩間徳也氏を訪ふ。殷墟出土品を多數所藏され見應へがあつた。兩氏とも極めて快く參觀を許されたのは感謝に堪えない。

七月十二日 曇 再度旅順の博物館を訪ふ。島田氏の案内で營城子壁畫古墳を見に行く。幸にして完存せる漢代の甌墓で内部に壁畫がある。既に「營城子」なる大冊に詳細に報告されて居るが、實見すれば又新たなるものがある。甌に施された彩色に纏はる問題、壁畫の意義等に就いては興味深きものが

ある。

館に戻り、稍詳細に見て後、歸途に就く。拓本もとる心算であつたが島田氏の好意に甘え、後に送つて貰ふことゝした。

七月十三日 曇 班員清水胃腸を害せるにより、遂に一船遅らせることゝし、終日讀書に送る。

七月十四日 曇後雨 散歩、讀書等に一日を送る。

七月十五日 晴 同じく一日休養す。

七月十六日 曇 清水も全快したので午前十一時吉林丸に乗船、いよゝ内地に向ふ。海上平穩。

七月十七日 晴 海上は極めて穩。讀書等に一日を送る。朝鮮沖とて島頗る多く、應接に暇なし。

よく晴れて美しき眺めである。夜に入つて對馬の燈臺見ゆ。

七月十八日 晴 午前六時、門司入港。久し振りに見る内地の風光は實に美しい。その反面何處か

狭苦しい感じがする。上陸を見合せ出帆を待つ。午後一時門司を後に神戸に向ふ。瀬戸内海の景勝地にかゝる前、日が暮れた。併し夜景も仲々美しい。

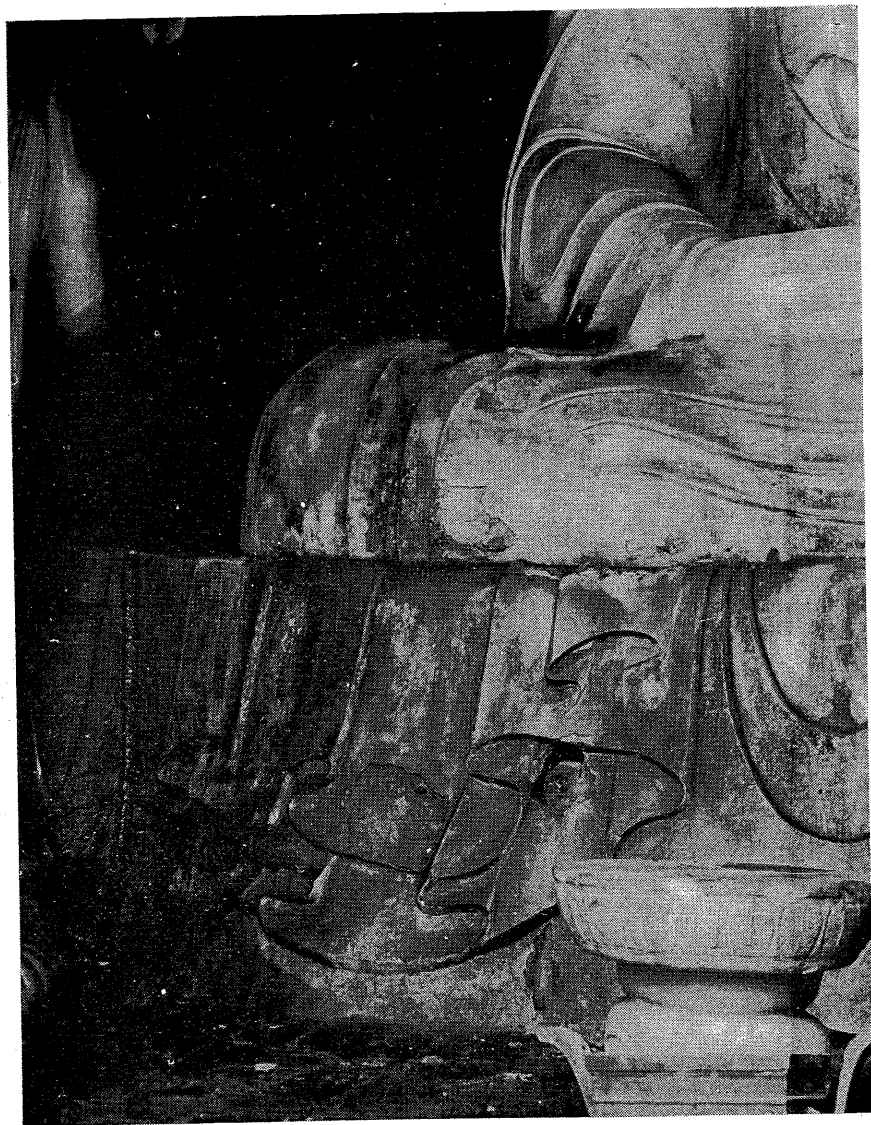
七月十九日 晴 起くれば既に朝霧の中を淡路島に沿つて進んで居る。七時神戸入港、小憩後縣廳に舊知を訪ひ、更に水害地を見學する。その猛威には唯驚くの外はない。三ノ宮より燕に乘じ一路東上。内地の風物に限りなき懐しさを感じつ、午後九時東京驛に安着。此處に七十日に互る旅行を無事終了、

歸宅した。

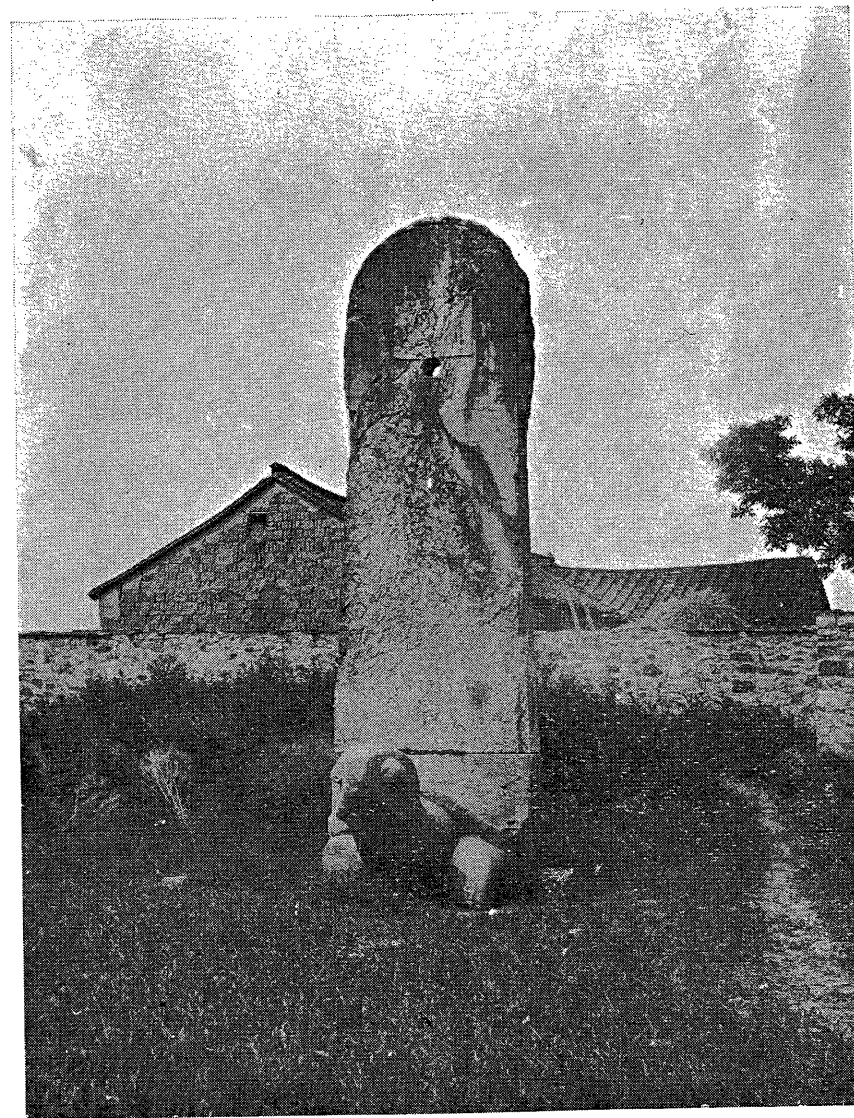
以上で今次調査旅行の大要を記し終つたのであるが、予の目的は冒頭に述べし如く、大勢を洞察して今後に資せんとするにあつた。それ故一ヶ所の精密なる調査に捉はれず、廣範圍の地を旅したのであつて、當然個々の調査は不十分なものが多い。加へて歸國後も雜務多忙にて研究を加へる機もなかつたから詳細に互る論攷は之を後日に期することゝした。

本旅行によつて得たる結論としては研究を志す者は先づ支那を理解して後ち進むべきものであり、發掘等の事業は今後を期し得るから、第一に確固たる基礎を有する有爲の人物多數を作り、徐に研究、事業を起すべきであると思はれる。

即ち従來の資料は既に多くは一等資料たり得ないのであり、新遺跡の發見は十分期待出来るのであるから功を急がず、確固たる地盤を築くことを心がくべきであらう。

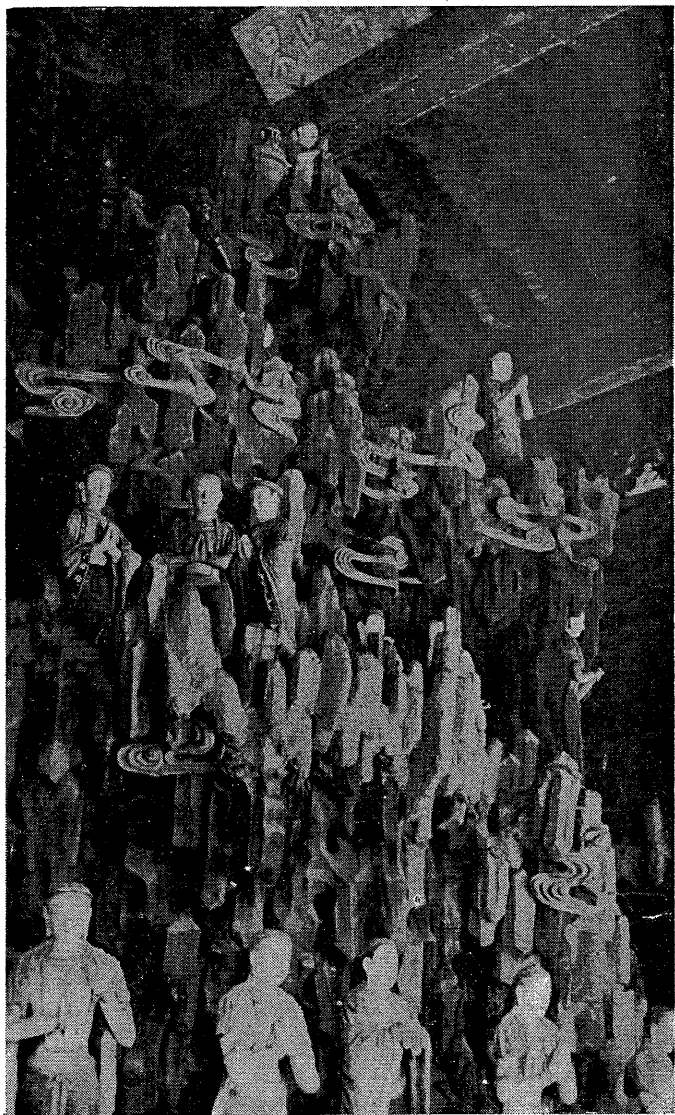


第四圖 棲霞寺石佛の衣紋



第五圖 梁蕭秀の墓碑





第十三圖 北海極樂世界（北京）



第十四圖 雲 崗 石 佛